志津見ダム建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書8

神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡

2000年3月

建設省中国地方建設局
島根県教育委員会

序

建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所においては、『現代のおろち退治』といわれる斐伊川神戸川両水系を一体とした治水計画の一環として、斐伊川の上流に尾原ダム、神戸川の上流に志津見ダムを建設し、下流域の洪水の調節及び水道用水の確保等を目的とした多目的ダム建設事業を進めています。

ダムの事業用地内の埋蔵文化財については、文化財保護の主旨に則り関係機関と協議しながら必要な調査を実施し、記録の保存につとめています。

志津見ダム建設事業においても、島根県教育委員会と協議をし、同教育委員会や頓原町教育委員会の協力のもとに平成元年度より発掘調査を実施しているところです。

本報告書は、平成9・10年度に実施した神原Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く利用されることを期待します。

最後に今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力頂きました島根県教育委員会ならびに関係者各位に対し謝意を表します。

平成12年3月

建設省中国地方建設局
斐伊川神戸川総合開発工事事務所
所長　三宅且仁

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け平成元（1989）年度から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を行っています。

志津見ダムが建設される神戸川は、中国山地に源を発し、日本海に向け北流することから、古くは陰陽を結ぶ交通路としての役割を担っていました。また、神戸川の西に聳える三瓶山は、『出雲国風土記』には「佐比賣山」と記される秀麗な山容を誇っていますが、その生い立ちは今から約10万年前から噴火を繰り返した火山です。

本書で報告する神原Ⅰ・Ⅱ遺跡は、平成９・10年度に発掘調査を実施したもので、縄文時代の前期から近代に及ぶ間の住居跡や生業にかかわる遺構・遺物が確認され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料が得られました。

本書がこの地域の歴史・文化の理解や歴史学習などに役立てば幸いに思います。

終わりに、発掘調査及び本書の作成に当たり、建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所をはじめ各方面からご協力・ご指導を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げます。

平成12年３月

島根県教育委員会

教育長　山崎悠雄

例　　言

1．本書は、1997（平成９）・1998（平成10）の両年度にわたって、島根県教育委員会が建設省中国局の委託を受けて実施した、志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、下記の遺跡の調査報告書である。

神原Ⅰ遺跡　島根県頓原町大字志津見字神原所在

神原Ⅱ遺跡　島根県頓原町大字志津見字神原所在

2．図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指している。

3．本書で使用した遺構記号は以下の通りである。

ＳＩ（竪穴住居跡）、ＳＢ（掘立柱建物跡）、ＳＫ（土坑）、ＳＤ（溝）

4．遺物の実測は主に錦織稔之、坂根健悦、佐藤幸子、手銭誠が行い、島谷芳雄、野中洋子、高橋啓子、板垣見知子、羽島ひとみがこれに加わった。また、遺構・遺物実測図の浄書・掲載図面の作成は、主に清水聡子、野中洋子、高橋啓子、板垣見知子、羽島ひとみがあたった。写真は調査員が撮影したものである。

5．出土遺物のうち、近世陶磁器は有田町立歴史民俗資料館村上伸之学芸員に、中世陶磁器は広島県立美術館村上勇学芸員にご教示いただいた。また、石器の石材鑑定は島根大学総合理工学部教授高須晃氏に鑑定していただいた。ともに記して感謝したい。

6．発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部

布村幹夫（現場事務所長）、原　博明、持田明典、金山浩司（技術員）、市川美奈（事務員）

7．調査に当たっては、別途調査指導の方の他に次の方々にも有益な指導助言と協力をいただいた。

松本岩雄、柳浦俊一、角田徳幸、田中迪亮、山崎順子

8．本書の編集・執筆は島谷芳雄、錦織稔之、田中勝、坂根健悦、佐藤幸子が行い、校正作業に守屋かおる、来海順子の協力を得た。

9．出土遺物および実測図・写真は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地で保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 4

Ⅲ　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡と調査の概要 …… 7

Ⅳ－1．神原Ⅰ遺跡A区の調査 …… 10
　－2．　〃　　B区の調査 …… 41
　－3．　〃　　C区の調査 …… 44
　－4．　〃　　D区の調査 …… 50

Ⅴ－1．神原Ⅱ遺跡1区の調査 …… 77
　－2．　〃　　2区の調査 …… 106
　－3．　〃　　3区の調査 …… 154

Ⅵ　自然科学的分析 …… 155

Ⅶ　まとめ …… 160

挿　図　目　次

第1図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置図 …… 1
第2図　神戸川と志津見ダム建設予定地位置図 …… 1
第3図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡と周辺の遺跡分布図（1:100000） …… 5
第4図　神原Ⅰ遺跡97・98年度発掘調査区位置図（1:3000） …… 8
第5図　神原Ⅰ遺跡97年度調査区配置図（A～D区）図（1:2000） …… 9
第6図　A区調査区設定図（1:1500 …… 10
第7－1図　A区調査後地形測量図及び遺構配置図（1:400） …… 11
第7　2図　A区土層断面図（1:120） …… 12
第8図　A区南側半分遺構配置図（1:160） …… 13
第9図　A区S101遺構実測図（1:40） …… 14
第10図　A区S101出土遺物実測図（1:3） …… 15
第11図　A区S102遺構実測図（1:40） …… 17
第12図　A区S102石組カマド実測図（1:30） …… 18
第13図　A区S102出土遺物実測図（1:3） …… 19
第14図　A区S103遺構実測図（1:60） …… 20
第15図　A区SB01・02遺構実測図（1:60） …… 20

第16図　A区ＳＢ01・02遺構断面図（1:60）……21
第17図　A区南端ピット群遺構実測図（1:60）……23
第18図　A区ＳＫ01・02遺構実測図（1:30）……24
第19図　A区ＳＫ01出土遺物実測図（1:3）……24
第20図　A区ＳＫ03遺構実測図（1:60）……25
第21図　A区ＳＫ06遺構実測図（1:30）……26
第22図　A区鉄滓溜まり出土状況図（1:30）……27
第23図　A区第１黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）……28
第24図　A区第１黒色土層出土石器実測図（1:4）……29
第25図　A区第２黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）……29
第26図　A区出土弥生土器実測図（１）（1:3）……30
第27図　A区出土弥生土器実測図（２）（1:3）……31
第28図　A区出土弥生土器実測図（３）（1:3）……32
第29図　A区出土弥生土器実測図（４）（1:3）……32
第30図　A区出土土師器実測図（１）（1:3）……33
第31図　A区出土土師器実測図（２）（1:3）……33
第32図　A区出土土師器実測図（３）（1:3）……34
第33図　A区出土須恵器実測図（1:3）……35
第34図　Ⅰ・Ⅱ遺跡出土陶磁器実測図（１）（1:3）……36
第35図　Ⅰ・Ⅱ遺跡出土陶磁器実測図（２）（1:3）……37
第36図　A区・Ⅰ区出土銅銭拓影図（1:1）……38
第37図　A区出土フイゴ羽口実測図（１）（1:3）……39
第38図　A区出土フイゴ羽口実測図（２）（1:3）……40
第39図　B～D区調査区設定図（1:1500）……41
第40図　B区調査区とトレンチ配置図（1:800）……42
第41図　B区トレンチ土層断面図（1:100）……43
第42図　C・D区土層断面図（1:80）……45・46
第43図　C区第２黒色土上面遺物出土分布図（1:400）……47
第44図　C区第２黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）……48
第45図　C区第２黒色土層出土石器実測図（1:3）……48
第47図　C区第３黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）……49
第46図　C区第３黒色土層上面遺物出土分布図（1:400）……48
第48図　D区第１黒色土層縄文土器出土分布図（1:400）……51
第49図　D区第１黒色土層石器類出土分布図（1:400）……52
第50図　D区第１黒色土層弥生土器出土分布図（1:400）……53
第51図　D区第１黒色土層出土縄文土器実測図（１）（1:3）……54
第52図　D区第１黒色土層出土縄文土器実測図（２）（1:3）……55
第53図　D区第１黒色土層出土縄文土器実測図（３）（1:3）……57
第54図　D区第１黒色土層出土縄文土器実測図（４）（1:3）……58
第55図　D区第１黒色土層出土石器実測図（１）（1:3）……59
第56図　D区第１黒色土層出土石器実測図（２）（1:3）……60
第57図　D区第１黒色土層出土石器実測図（３）（1:4）……61
第58図　D区出土弥生土器実測図（１）（1:3）……63
第59図　D区出土弥生土器実測図（２）（1:3）……64
第60図　D区出土弥生土器実測図（３）（1:3）……64
第61図　D区出土須恵器実測図（1:3）……64
第62図　D区第２黒色土層遺物出土分布図（1:400）……66

第63図　D区第２黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）…… 66
第64図　D区第２黒色土層出土石器実測図（1:3）…… 67
第65図　D区第３黒色土上層遺物出土分布図（1:400）…… 68
第66図　D区第３黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）…… 70
第67図　D区第３黒色土層出土石器実測図（１）（1:3）…… 71
第68図　D区第３黒色土層出土石器実測図（２）（1:3）…… 72
第69図　D区第３黒色土層出土石器実測図（３）（1:4）…… 73
第70図　D区第３黒色土下層遺物出土分布図（1:400）…… 74
第71図　D区第３ハイカ面落し穴実測図（1:30）…… 75
第72図　D区第３ハイカ面剥片石器出土状況図（1:30）…… 75
第73図　D区第３ハイカ面出土剥片石器実測図（1:2）…… 75
第74図　神原Ⅱ遺跡Ⅰ・Ⅱ区調査区設定図（1:1500）…… 77
第75図　１区土層断面図（1:150）…… 79・80
第76図　１区第１ハイカ面検出遺構配置図（1:400）…… 81
第77図　１区Ｓ101遺構実測図（1:40）…… 82
第78図　１区Ｓ101カマド遺構実測図（1:20）…… 82
第79図　１区Ｓ101出土遺物実測図（１）（1:3）…… 83
第80図　１区Ｓ101出土遺物実測図（２）（1:3）…… 84
第81図　１区ＳＢ01遺構平面図（1:60）…… 85
第82図　１区ＳＢ01遺構断面図（1:60）…… 86
第83図　１区ＳＢ01杵穴土層断面図（1:40）…… 87
第84図　１区ＳＢ02遺構平面図（1:60）…… 88
第85図　１区ＳＢ02遺構断面図（1:60）…… 89
第86図　１区ＳＢ02柱穴土層断面図（1:40）…… 90
第87図　１区ＳＢ03遺構実測図・同断面図（1:60）…… 91
第88図　１区ＳＢ03柱穴土層断面図（1:40）…… 91
第89図　１区ＳＫ01遺構実測図（1:30）…… 92
第90図　１区ＳＫ02遺構実測図（1:30）…… 93
第91図　１区ＳＫ03遺構実測図（1:30）…… 94
第92図　１区ＳＫ04～09遺構実測図（1:40）…… 95
第93図　１区ＳＫ10～13遺構実測図（1:40）…… 96
第94図　１区第１黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）…… 98
第95図　１区第１黒色土層出土石器実測図（1:2、1:4）…… 99
第96図　１区出土弥生土器実測図（１）（1:3）…… 100
第97図　１区出土弥生土器実測図（２）（1:3）…… 101
第98図　ⅠⅡ遺跡出土陶磁器実測図（３）（1:3）…… 102
第99図　ⅠⅡ出土陶磁器実測図（４）（1:3）…… 103
第100図　１区第２黒色土層遺物出土分布図（1:400）…… 104
第101図　１区第２黒色土層出土縄文土器実測図（1:3）…… 105
第102図　２区土層断面図（1:100）…… 107・108
第103図　２区第１ハイカ面遺構配置図（1:300）…… 110
第104図　２区ＳＩ01および周辺ピット群遺構実測図（1:30）…… 112
第105図　２区ＳＢ01遺構実測図（1:60）…… 114
第106図　２区ＳＢ01柱穴土層断面図（1:40）…… 115
第107図　２区ＳＢ02遺構実測図（1:60）…… 116
第108図　２区ＳＢ02柱穴土層断面図（1:40）…… 116
第109図　２区ＳＫ16周辺ピット群遺構実測図（1:60）…… 117

第110図　2区ＳＫ01遺構実測図（1:30） …… 118
第111図　2区ＳＫ02遺構実測図（1:30） …… 119
第112図　2区ＳＫ03遺構実測図（1:30） …… 120
第113図　2区ＳＫ04遺構実測図（1:30） …… 121
第114図　2区ＳＫ05遺構実測図（1:30） …… 121
第115図　2区ＳＫ06遺構実測図（1:30） …… 121
第116図　2区ＳＫ07遺構実測図（1:30） …… 122
第117図　2区ＳＫ08遺構実測図（1:30） …… 122
第118図　2区ＳＫ09遺構実測図（1:30） …… 123
第119図　2区ＳＫ10遺構実測図（1:30） …… 123
第120図　2区ＳＫ11遺構実測図（1:30） …… 123
第121図　2区ＳＫ12遺構実測図（1:30） …… 124
第122図　2区ＳＫ13遺構実測図（1:30） …… 124
第123図　2区ＳＫ14遺構実測図（1:30） …… 125
第124図　2区ＳＫ15遺構実測図（1:30） …… 125
第125図　2区ＳＫ16遺構実測図（1:30） …… 126
第126図　2区ＳＫ17遺構実測図（1:30） …… 126
第127図　2区ＳＫ19遺構実測図（1:30） …… 127
第128図　2区ＳＫ20遺構実測図（1:30） …… 127
第129図　2区ＳＫ18遺構実測図（1:30） …… 127
第130図　2区ＳＫ21遺構実測図（1:30） …… 127
第131図　2区ＳＫ22遺構実測図（1:30） …… 127
第132図　2区ＳＤ01・02遺構断面図（1:30）および配置図（1:3000） …… 128
第133図　2区第１黒色上層出土縄文土器実測図（1:3） …… 130
第134図　2区第１黒色土層出土石器実測図（1:3） …… 130
第135図　2区出土弥生土器実測図（１）（1:3） …… 131
第136図　2区出土弥生土器実測図（２）・土師器（1:3） …… 132
第137図　2区出土弥生土器実測図（３）（1:3） …… 132
第138図　2区第２ハイカ面検出遺構配置図（1:300） …… 134
第139図　2区第２ハイカ面ＳＩ01遺構実測図（1:30） …… 135
第140図　2区第２ハイカ面ＳＫ01・02遺構実測図（1:20） …… 136
第141図　2区第２黒色土層焼土面実測図（1:30） …… 137
第142図　2区第２黒色土層遺物出土分布図（1:400） …… 138
第143図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（１）（1:3） …… 140
第144図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（２）（1:3） …… 141
第145図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（３）（1:3） …… 143
第146図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（４）（1:3） …… 144
第147図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（５）（1:3） …… 145
第148図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（６）（1:3） …… 146
第149図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（７）（1:4） …… 147
第150図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（８）（1:4） …… 148
第151図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（９）（1:4） …… 149
第152図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（10）（1:3） …… 150
第153図　2区第２黒色土層出土縄文土器実測図（11）（1:3） …… 151
第154図　2区第２黒色土層出土石器実測図（１）（1:2、1:4） …… 152
第155図　2区第２黒色土層出土石器実測図（２）（1:4） …… 153
第156図　3区第２黒色土層出土縄文土器実測図（1:3） …… 154

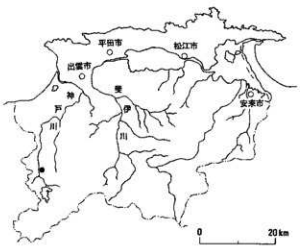
Ⅰ　調査に至る経緯と経過

1．調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水調整用のダムである。湛水地域は、島根県飯石郡頓原町大字角井から大字志津見にまたがり、面積は230㎢に及ぶ。これまでの発掘調査や分布調査によれば、ダムの湛水地域はもとより生活再建地や道路付け替え工事など関連事業を含め、事業地内には31か所の遺跡が確認されており、現在までにこのうち20か所近くが調査を終了している。

神原Ⅰ・Ⅱ遺跡は、飯石郡頓原町大字志津見に所在し、神戸川の右岸側にあって同一の段丘地形上の緩やかな斜面に隣り合う遺跡である。ダム建設計画の中では、国道184号線と県道川本波多線の付け替え予定地に程近い、湛水地域および道路予定地とされた箇所である。この二つの遺跡は、ダム用地決定後の遺跡分布調査で確認されたもので、当初は所在地の地名をとって下流側の遺跡を「森脇遺跡」、上流側の遺跡を「神原遺跡」と呼んでいた。しかし、今回の発掘調査を実施中に再度字名を調べたところ、「森脇」は対岸の地点を呼ぶ字名であることが判明したため、遺跡名を変更、両遺跡地内が字名「神原」で同一であることを確認したうえで、それまでの「神原遺跡」(旧) を「神原Ⅰ遺跡」(新) に、また「森脇遺跡」(旧) を「神原Ⅱ遺跡」(新) に改めた経緯がある。なお分布調査では、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡とも集落遺跡の可能性が強いものとみられたところで、その面積はおよそ前者が20000㎡、後者が32000㎡あるものと推定された。遺跡は名称上、二つに分かれてはいるが、両遺跡が立地する地形や、また後述する調査結果などを踏まえれば、両者は一連の遺跡とみて差し支えない。

第Ⅰ図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置図



第２図　神戸川と志津見ダム建設予定地位置図

2．調査の経過

97年度の志津見ダム発掘調査は、神原Ⅰ遺跡、神原Ⅱ遺跡、小丸遺跡の３

カ所について実施した。また、98年度においては神原Ⅱ遺跡・小丸遺跡・殿淵山遺跡・廻子谷遺跡の4カ所について発掘調査を行った。このうち、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査については両年度、次のような経過を辿った。

まず96年度の段階で、建設省から二つの遺跡対象地のうち、トンネル工事とこれに伴う工事用道路、および道路建設に伴う橋脚工事部分が急がれるとして、ともに山裾部分を早急に調査してほしい旨の協議があり、これを受けて当該部分から優先的に順次調査することとなった。これにより、97年度から神原Ⅰ・Ⅱ遺跡とも同時に調査をスタートさせ、神原Ⅰ遺跡の調査班は、まず橋脚工事が急がれるとされたA区（1600㎡）から調査を開始し、その後上流側（南側）に向かって道路予定地の延長部分であるB区（2700㎡）、C区（1000㎡）、D区（2200㎡）へと移って行った。また、もう一方の神原Ⅱ遺跡の調査班は、トンネル工事用の資材置き場と道路予定地とされた、1区（2600㎡）、2区（2500㎡）、3区（1400㎡）の順に調査を実施した。現地調査は、両班とも4月20日からはじめ、同年の12月25日まで行った。

つづく98年度は、神原Ⅰ遺跡の調査が緊急とされた道路予定地がひとまず終了したため、これを担当した調査班が神原Ⅱ遺跡にうつり、前年度調査区である3区から南側に向かって延びる道路予定地を、1区（2850㎡）・2区（2010㎡）に分けて調査することとなった。また、併せて前年度第2黒色土層の調査が未了のままであった地点についても3区（540㎡）と呼んで調査を実施した。現地調査は、4月20日から開始し、同年12月25日まで行った。

両年度の現地調査期間中、両遺跡に関わる現地説明会は特に開催しなかったが、毎年春秋に行われるボビー祭・コスモス祭の日に併せ、祭りのメイン会場である東三瓶フラワーバレー特設会場において、両遺跡出土の遺物の展示や写真資料による遺跡の解説などを行い、多数の来場者の方々に見ていただいた。また、同時に行った“ロウ鏡作り（粘土で銅鏡鋳型を作り、そこに蠟を流し込んで模擬銅鏡を作るもの）”や“石膏銅鐸作り（シリコン製の銅鐸鋳型に石膏を流し込んで模擬銅鐸を作るもの）”といった古代体験コーナーや、縄文人に扮した当センター職員との記念撮影を楽しんでもらう“縄文人とハイ、チーズ！”コーナーなどの小イベントも好評を博した。

なお97・98年度の調査は、両遺跡のなかでも特に緊急性の高い道路予定地などに限られたため、遺跡のすべてが調査されたわけではない。残る調査対象地についても、付け替え道路および湛水地域に関係するため、引き続き発掘調査が実施される予定であることを付記しておく。

3．調査の組織・参加者

97年度の神原Ⅰ遺跡、98年度の神原Ⅱ遺跡の両発掘調査と、これにかかわる報告書の作成に携わった関係者は、次のとおりである。

平成9（1997）年度

事務局　勝部　昭（文化財課長）、島地徳郎（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、古崎蔵治（同課長補佐）、渋谷昌宏（同企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　鳥谷芳雄（埋蔵文化財調査センター主幹）、田中　勝（同教諭兼主事）、坂根健悦（同臨時職員）

遺物整理者　二浦登久子、山下千都子、北野　恵、持田紫穂、清水聡子

調査作業員　景山栄子、長嶋庸子、川上友子、空岡ミドリ、片山ハルミ、笹田　崇、木村弘美、本間道義、影山晴巳、北尾百合子、渡辺澄江、藤原イミコ、桐原定信、藤原良信、藤谷義行、坪倉昭雄、藤村弘長、桐原美信、桐原利江、勝部キミエ、石森勉、瀬尾英治、家島君江、藤原敏志、温湯清、温湯利明、後藤清一、原ノブ子、板垣守正、桐原慶治、清水唯義、田原一善、難波朝江、温湯セチコ、藤原春利、小畑明子、水津サミ子、渡部厚司、影山晴巳、落部一美、白築登、深石広子、森山潤、三上拓志、景山敬示

調査指導者　穴沢義功（たたら研究委員）、河瀬正利（広島大学文学部助教授）、松井整司（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

平成10（1998）年度

事　務　局　勝部　昭（文化財課長）、島地徳郎（文化財課長補佐）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、秋山　実（同課長補佐）、松本岩雄（同課長補佐）、川崎　崇（同企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　鳥谷芳雄（埋蔵文化財調査センター主幹）、錦織稔之（同教諭兼主事）、坂根健悦（同臨時職員）

遺物整理者　金森千勢子、和田初子、二浦登久子、山下千都子、北野　恵、手銭　誠

調査作業員　景山栄子、長嶋庸子、川上友子、空岡ミドリ、片山ハルミ、笹田　崇、木村弘美、本間道義、影山晴巳、北尾百合子、渡辺澄江、藤原イミコ、桐原定信、藤原良信、藤谷義行、坪倉昭雄、藤村弘長、桐原美信、桐原利江、勝部キミエ、石森勉、瀬尾英治、家島君江、藤原敏志、温湯清、温湯利明、後藤清一、影山晴巳、田村三和子、塚尾友江、三上光江、塚原　誠、友塚昭之、持田紫穂

調査指導者　河瀬正利（広島大学文学部教授）、松井整司（島根大学汽水域研究センター客員研究員）、村上伸之（佐賀県有田町立歴史民俗資料館学芸員）

平成11（1999）年度

事　務　局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、秋山　実（同総務課長）、松本岩雄（同調査課長）、今岡　宏（同総務係長）、渡邊紀子（同総務係主任）、川崎　崇（同総務係主事）

調　査　員　鳥谷芳雄（埋蔵文化財調査センター主幹）、錦織稔之（同教諭兼主事）、坂根健悦（同臨時職員）、佐藤幸子（同臨時職員）、大谷朋子（同臨時職員）

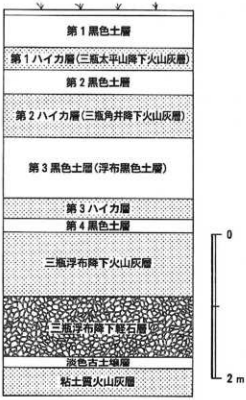
遺物整理者　野中洋子、高橋啓子、板垣見知子、羽島ひとみ、露梨靖子、笠井文恵、佐々木順子、伊藤悟郎

調査指導者　小林青樹（岡山大学埋蔵文化財調査センター助手）、下江健太（岡山大学文学部大学院生）、高須　晃（島根大学総合理工学部教授）、村上　勇（広島県立美術館学芸員）

Ⅱ　位置と環境

神戸川は島根県と広島県の境に位置する女亀山（標高830ｍ）から発し、赤来町より北進する。途中、頓原町の頓原川や佐田町の伊佐川、掛合町から流れる波多川と合流しながら出雲市南西部に入り、大きく西走していく。建設省の資料によると、流域面積は471㎢、流路延長87㎞の一級河川である。島根県東部を流れるこの神戸川は、出雲平野を貫流しながら日本海に注ぎ下る。

神原Ⅰ・Ⅱ両遺跡は国道184号線と県道川本・波多線が交錯するところ、志津見橋東側から500ｍ川上に位置する。これは、その西側に三瓶山（標高1126ｍ）が控え、その噴火によって降下・堆積した火山灰層が構成する河岸段丘のやや狭い平坦面にある。遺跡の層序は、上層より第１黒色土層－第１ハイカ層（約3600年前）－第２黒色土層－第２ハイカ層（4700年前）－第３黒色土層－三瓶浮布火山灰層－三瓶浮布降下軽石層の順になっている。なおハイカとは三瓶山の火山灰の地元での名称である。

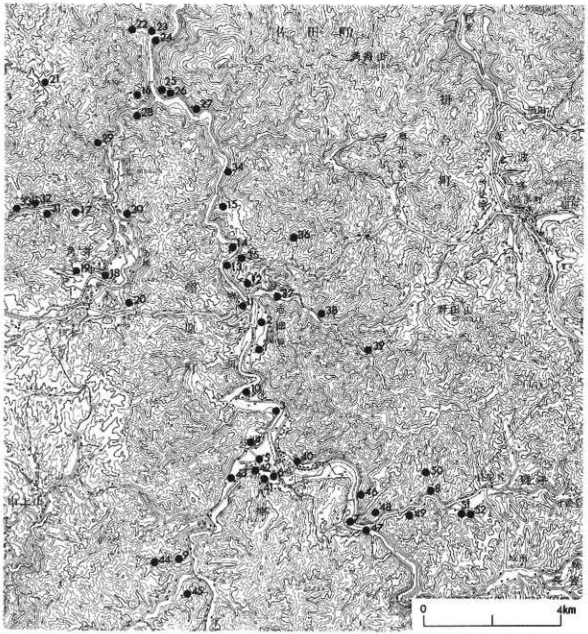


報告書『板屋Ⅲ遺跡』（1998．3）より転載。

１．縄文時代

周辺地域の各遺跡からは遺構・遺物とも豊富な資料が確認されている。板屋Ⅲ遺跡からは前期の平地式住居２棟をはじめ集石炉や落とし穴が検出され、下山遺跡では早期の押型文土器や繊維土器が、さらに草創期末の表裏条痕文土器や縄文地土器については県内最古

神原Ⅰ遺跡D区の土層堆積状況写真。上から順に第１黒色土層、第１ハイカ層、第２黒色土層、第２ハイカ層、第３黒色土層、第３ハイカ層とつづく。



第3図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡と周辺の遺跡

1．神原Ⅰ遺跡　2．神原Ⅱ遺跡　3．中原遺跡　4．谷川遺跡　5．森遺跡群
6．五明田遺跡　7．比丘尼塚古墳　8．竹谷遺跡　9．三代木遺跡
10．小丸遺跡　11．門遺跡　12．板屋遺跡群　13．徳原遺跡
14．後平遺跡　15．貝谷遺跡　16．下山遺跡　17．伊比谷遺跡
18．角井遺跡　19．堂ノ原横穴墓　20．杉戸遺跡　21．獅子谷遺跡
22．戸井谷遺跡　23．戸井谷尻遺跡　24．長老畑遺跡
25．殿淵山毛宅前鉧跡　26．殿淵カナクソ畑鉧跡　27．大横鉧跡
28．権現上鉧三跡　29．獅子谷遺跡（大鍛冶場跡）　30．向原鉧跡
31．伊比谷1号鉧跡　32.伊比谷2号鉧跡　33．伊比谷3号鉧跡
34．丸山鉧跡　35．徳原鉧跡　36．板屋奥鉧跡　37．弓谷尻鉧跡
38．弓谷鉧跡　39．弓谷奥鉧跡　40．慶雲寺鉧跡　41．段原鍛冶跡
42．土居ノ上鉧跡　43．坂根鍛冶跡　44．三代木鉧跡　45．大蔵鉧跡
46．鉧原鉧跡　47．落合製錬所跡　48．獅子尻鉧跡　49．獅子古鉧跡
50．梅ケ迫谷鉧跡　51．市場鉧跡　52．仁井屋鉧跡

級のものとなる。中期から後期については、板屋Ⅲ遺跡において第２ハイカ層上面より円形土坑やピットが見られ、中期前半の船元式併行期と考えられる土器も出土している。後期から晩期にかけては土坑群や円形の溝と石列に囲まれた周溝墓が門遺跡から、また多くの集石土坑や立石土坑が下山遺跡から検出され、縄文時代の墓制を知る上での貴重な手掛かりを得た。この２遺跡からはそれぞれ土偶も出土し、祭祀遺構としても注目される。

２．弥生時代

前期の遺跡は今のところ発見されていない。門遺跡からは中期から後期の多くの竪穴住居跡や掘立柱の倉庫跡、甕棺墓等を検出し、かなり大規模な集落跡であったことが分かっている。甕棺は炊飯の使用痕のある甕３個体を転用しており、森遺跡においても石組み骨格に粘土を覆った竈が取り付けられた竪穴住居跡が知られている。また、谷川遺跡からは、磨製石斧・金銅製耳環が出土している。

３．古墳時代

門遺跡から７世紀代の横穴式石室が２基検出されており、この遺跡に律令期の集落が始まる時期にあたることは注目される。中原遺跡でも７世紀前半に横穴式石室が築造されている。集落跡としては森・板屋Ⅲ遺跡で後期の竪穴住居跡が多数検出されている。

４．奈良・平安時代

門遺跡の竪穴住居跡の多くより鉄塊や鍛造剥片が出土しており、製鉄生産に関連した集落が営まれていたようである。また隣接地には、庇付きの掘立柱建物跡や櫂列状の溝があり、『出雲国風土記』の志都美の関との関連性が指摘されている。

５．中世

製鉄遺構が以後の遺跡から多く検出されている。門遺跡の製鉄炉と鍛治炉は前述の竪穴住居跡と隣接する地点に確認されている。板屋Ⅲ遺跡からは時期不明ではあるが箱型製鉄炉が、またこれまで中国地方では知られてない竪型製鉄炉が検出されている。殿淵・戸井谷尻遺跡からも竪型炉・箱型炉が見つかっている。

６．近世

下山遺跡より中世末から近世初頭と見られる２基の製鉄炉が出ている。檀原遺跡では製鉄炉の床釣り施設や池状遺構、鍛治炉、排滓山が検出され18C後半の製鉄遺構の資料となっている。これは江戸時代にたたらを経営した鉄山師である田儀櫻井家に残る『田儀櫻井家文書』の中の「檀原炉」との関連も考えられる。また大丰鉧跡からは２基の床釣り施設と５基の鍛治炉、鉄池状遺構などが、丸山遺跡からも床釣り施設が検出されている。19C前半と見られる大鍛治場跡から鉄床石を挟ん本場、左下場、排水溝などが確認されたのは中原遺跡である。これは江戸時代以降の典型的な構造ではあるが、調査例はほかに多くはない。

Ⅲ　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査の概要

1．調査区の設定

神原Ⅰ遺跡は1997年度に本調査を行い、地形的な都合上A～Dの4区に分けてそれぞれ調査した。そして国土座標軸をもとに一辺10ｍの方眼を調査区上に設定し、東西軸を算用数字で、南北軸をアルファベットで表すことにした。まず、A区については（第6図）、国土座標のX＝－97，300軸とY＝48，100軸の交点を基準点「0A」とし、10ｍ間隔でX軸を南に1・2・3・…・10、Y軸を西にB・C・D・…・Gとして、軸で囲まれたグリッドの呼び方についてはその北東の交点の名称でもって呼ぶことにした（例えば「2D区」）。B～D区については、国土座標のX＝－97，720軸とY＝48，030軸の交点を基準点「0Y」とし、10ｍ間隔でX軸を北に1・2・3・…・18、Y軸を西にZ・A・B・…・Kとして、グリッドの呼称はその南東の交点の名称をあてた（第39図）。

神原Ⅱ遺跡の1998年度の本調査は、1～3の3区に分けてそれぞれ調査した。そして神原Ⅰ遺跡同様の方法で、1997年度に定めた基準点「0A」（X＝－96，840・Y＝48，270）をもとに10ｍ間隔でX軸を南に1・2・3・…・46、Y軸を西にB・C・D・…・Rとして、グリッドの呼称はその北東の交点の名称をあてた（第74図）。

2．遺跡の層序

神原Ⅰ・Ⅱ両遺跡の層序はおおむね、表土層－第1黒色土層－第1ハイカ（三瓶太平山降下火山灰）層－第2黒色土層－第2ハイカ（三瓶角井降下火山灰）層－第3黒色土（浮布黒色土）層、となっている。ただ、神原Ⅰ遺跡A区では崖崩れのため第3黒色土層がなく、崖錐礫混土が堆積している。この中で遺物包含層は第1黒色土層及び第2黒色土層で、遺構面は地点によって違いはあるが第1ハイカ層上面及び第2ハイカ層上面である。なお各土層の年代は、14C年代で第1ハイカ層が3530±100B.P.～3710±130B.P.、第2ハイカ層が4780±100B.P.と測定されている。

3．遺構及び遺物の概要

神原Ⅰ・神原Ⅱ両遺跡で検出された主な遺構及び遺物は以下のとおりである。

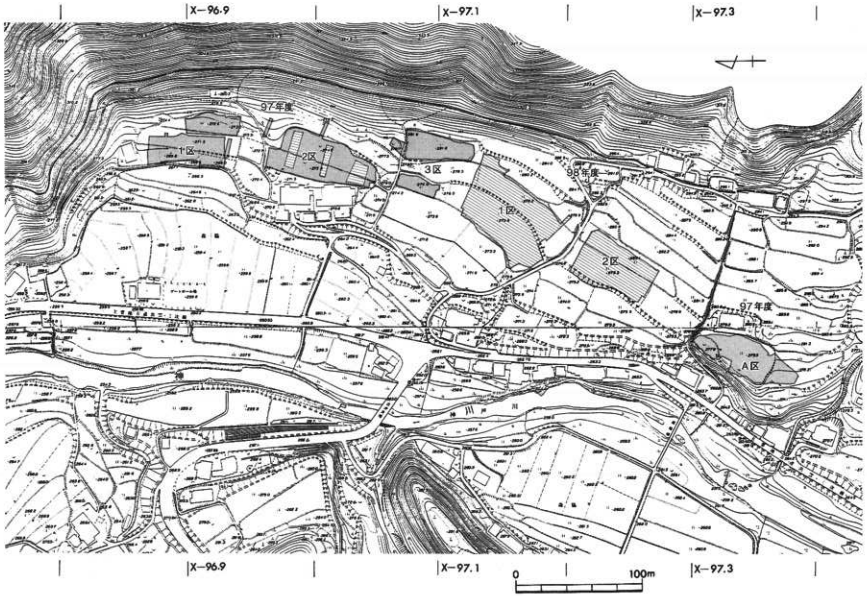
【縄文時代】落とし穴1・縄文土器・石器〔神原Ⅰ〕、住居跡1・焼土面18・土坑3・縄文土器・石器〔神原Ⅱ〕

【弥生時代】弥生土器・石器〔神原Ⅰ・Ⅱ〕

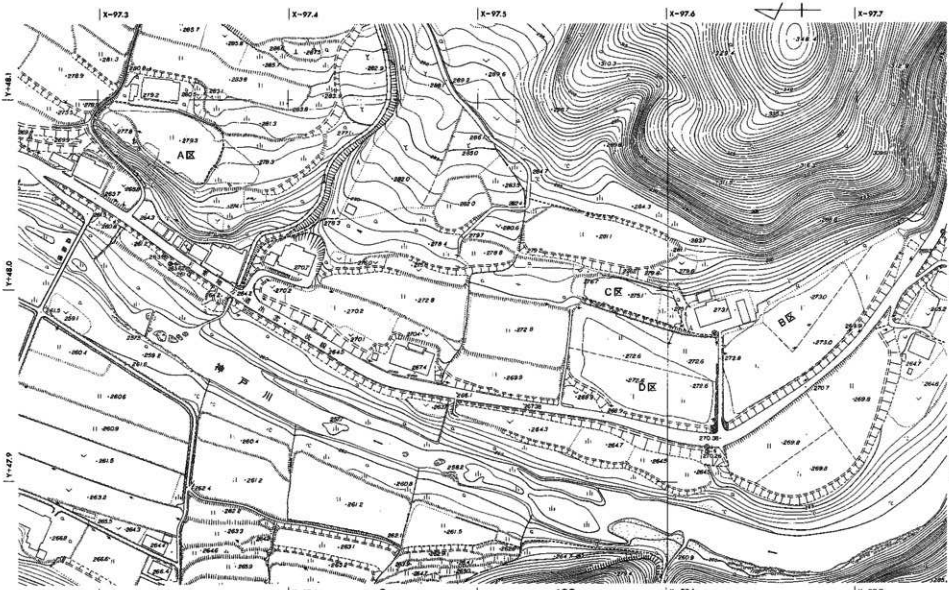
【古墳時代】竪穴住居跡2・土坑2・溝状遺構1・土師器・須恵器〔神原Ⅰ〕、竪穴住居跡2・土師器・須恵器・鉄製品〔神原Ⅱ〕

【室町時代】陶磁器〔神原Ⅰ・Ⅱ〕

【近世～　】掘立柱建物跡2・溝状遺構2・製鉄関連土坑1・集石土坑1・鉄滓溜まり1・土坑2・陶磁器・小型るつぼ（鋳掛け用か？）・羽口・古銭・鉄製品・鉄滓〔神原Ⅰ〕、掘立柱建物跡5・溝状遺構1・集石土坑6・粘土貼土坑13・土坑16・陶磁器・古銭・鉄製品・鉄滓〔神原Ⅱ〕



第4図　神原Ⅰ遺跡 '97・'98年度発掘調査区位置図（1：3000）



第5図　神原Ⅰ遺跡 '97年度調査区配置図（1：2000）

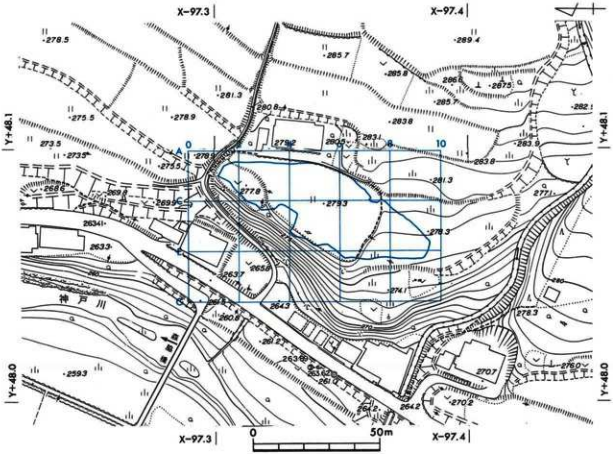
Ⅳ－1　神原Ⅰ遺跡A区の調査

1．調査の概要（第6～8図）

調査区は、標高274～278ｍほどの緩やかな斜面である。東側は山腹が背後にせまり、西側は急斜面となって国道下へと降りる。また、北側はほぼ同じレベルで神原Ⅱ遺跡につながり、南側は谷川を挟んでB～D区へとつながる。調査前は北側大半が水田、南側一部が桑畑であった。

土層の大まかな層序については3地点で記録を取った。調査区北部のａ－ａ´地点は、緩やかな斜面に茶褐色の客土を積み上げて、水田として利用するために造成されている。客土層の下には第1黒色土層が厚さ50～100㎝で堆積し、さらにその下層には第1ハイカ層が厚く堆積していた。調査区中央部北寄りのｂ－ｂ´地点は、厚いところで170㎝も堆積していた第1ハイカ層の上に20～140㎝で客土を盛って水平に整地し、水田利用されていた。第1ハイカ層の下には第2黒色土層が厚いところで60㎝堆積し、さらにその下には第2ハイカ層が確認された。ｃ－ｃ´地点は調査区南部にあたり、斜面のまま桑畑に利用されていた場所である。土層図は表土除去後の様子であり、第1黒色土層に該当する土層は100～150㎝、その下には第1ハイカが厚く堆積していた。

遺物及び遺構については、第2黒色土層中から出土した粗製の縄文土器が最も古い。第1黒色土中からは縄文時代晩期の突帯文土器や磨石、弥生時代の前期・中期・後期土器片が出土している。古墳時代のものでは後期の竪穴住居跡3（ＳＩ01・02・03）、性格不明の円形土坑2（ＳＫ01・02）、溝跡1（ＳＤ02）が検出できた。特にＳＩ02はカマドの保存状態が比較的良くその構造が良く解る



第6図　A区調査区設定図（1：1500）

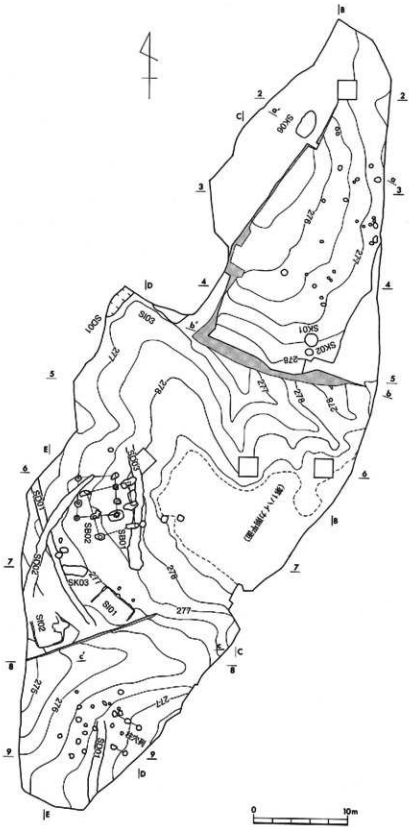
例である。遺物では後期の土師器、須恵器片が出土している。その後は中世に至り、14世紀後半の室町時代の輸入青磁が出土する。近世以降では掘立柱建物跡2（SB01・02）、製鉄（鍛冶か）関連土坑1（SK03）、麻蒸しの地下構造部分とみられる集石土坑1（SK06）、土坑2（SK04・05）、溝跡2（SD01・03）といった遺構が検出でき、陶磁器の他、フイゴ羽口や鉄滓といった製鉄（鍛冶か）関連の遺物や、鋳掛け用かと思われる小型るつぼ、それに銅銭などが出土している。

2．遺構と遺物

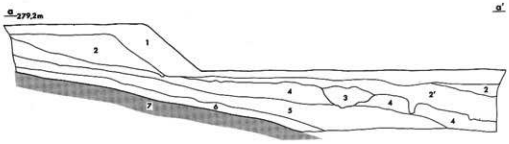
(1) 第1黒色土層検出の遺構

SI01（第9図、図版6～8）

調査区中央部南寄りで検出した、平面プランが方形の竪穴住居跡である。南西辺が破壊されているため正確な規模は分からないが、残りの良かった北東辺は4.1mで、深さは0.35mである。住居跡内には焼土面が2ケ所認められ、一つはカマド周辺であり、もう一つは中央やや東寄りのところ

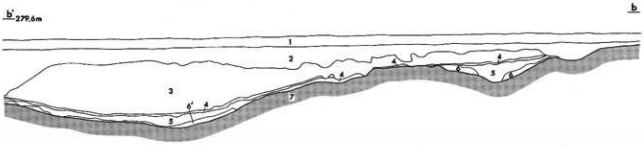


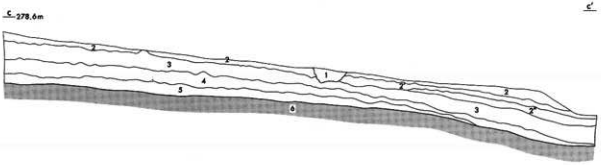
第7－1図　A区調査後地形測量図および遺構配置図（1：400）



1.表土層
2.茶褐色土層(客土)
2'茶褐色土層(客土)
3.SK06
4.黒色土層
5.暗黒色土層
6.黒灰色土層
7.灰褐色粘質土層(第1ハイカ)

1.表土層
2.灰茶褐色砂礫土層
3.灰白色砂礫土層(第1ハイカ)
4.暗灰白色土層(オドリ)
5.暗黒褐色土層(第2黒色土)
6.明茶褐色土層
6'灰褐色土層
7.明灰茶褐色土層(第2ハイカ)

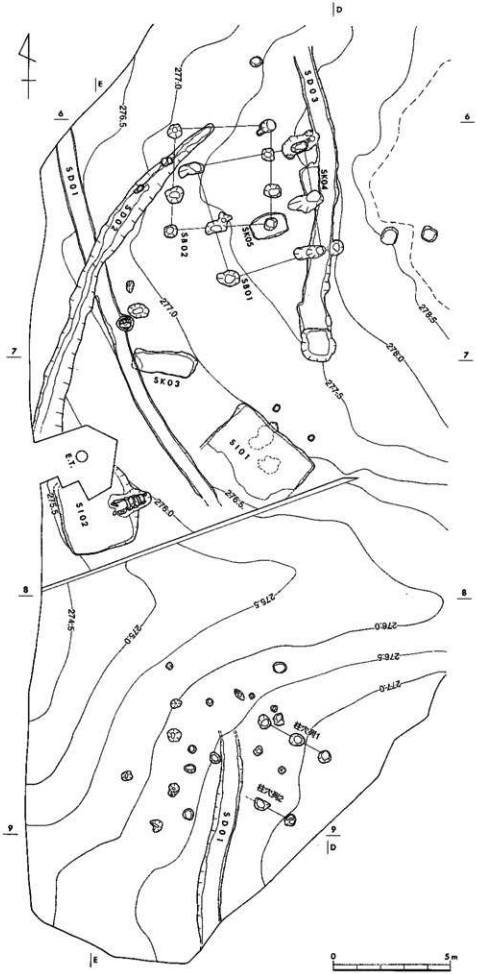




1 .SD01
2 .暗黒灰色土層
2'.黒色土層
2''.黒褐色土層(ややしまる)
3 .黒色土層
4 .暗黒褐色土層(ややしまる)
5 .暗褐色土層
6 .褐色土層(第1ハイカ)

0 4m

第7－2図　A区土層断面図（1：120）

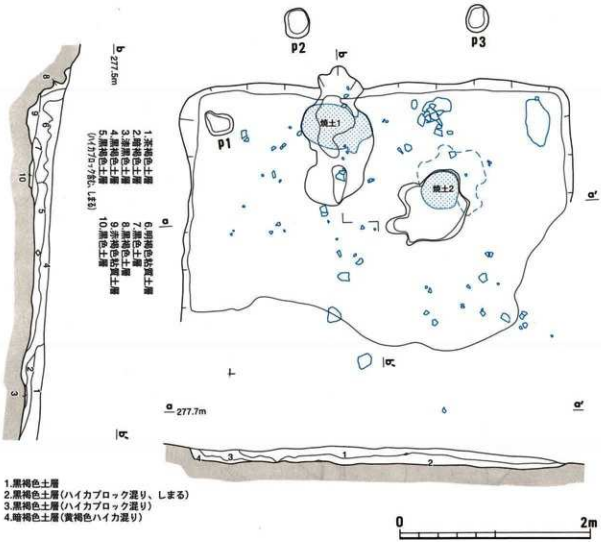


第8図　A区南半分遺構配置図（1：160）

である。それぞれの規模は、カマド周辺の焼土面1は0.45×0.75ｍの長楕円形で、もう一つの焼土面2が径0.4ｍの円形である。いずれの焼土面とも、その下は浅く掘り込まれており、底面には赤褐色粘質土が貼られていた。ピットについては、住居跡内北隅のＰ.１（径23～28㎝・深さ９㎝）と、住居跡の外、北東側の緩やかな傾斜地に壁に平行してＰ.２（径26～31㎝・深さ11㎝）、Ｐ.３（径25～30㎝・深さ８㎝）の２つを検出した。遺物については、住居跡内から小範囲に須恵器と土師器の小片が出土した。

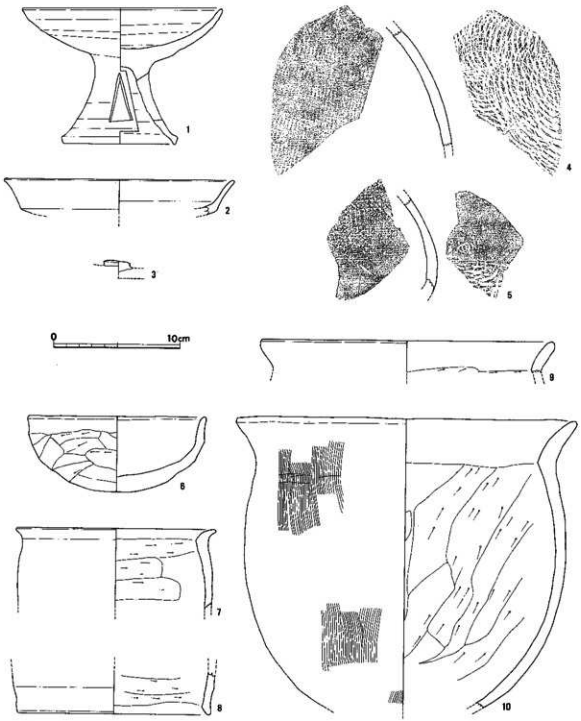
ＳＩ01出土遺物（第10図、図版37）

出土遺物には、須恵器、土師器がある。１～５が須恵器、６～10が土師器である。１は高坏で、口径16,0㎝、器高10,8㎝、底径9,0㎝で、調整は基本的に内外面とも回転ナデもしくはナデである。脚部には３方向に透かしがあり、うち１方向はヘラ状工具で三角形に抜き、残る２方向は縦方向に線状に入れただけである。坏部内面には、径８㎝ほどの焼きむらが認められ、底径にほぼ等しいことから、同大同形の高坏を重ね焼きしていたものと思われる。２は高坏の坏部と考えられる小破片で、推定口径は18,5㎝である。調整は回転ナデ。淡灰色を呈し、器表面に薄く自然釉がかかる。３



第９図　Ａ区ＳＩ01遺構実測図（１：40）

は、宝珠形のつまみの付く坏蓋片である。4は甕の体部破片で、外面には格子状タタキ目、内面には同心円状のタタキ目痕が残る。5は壷・瓶類の体部破片で、外面は上半部が格子状タタキ目の後回転ナデ、下半部が格子状タタキ目、内面は上半部が回転ナデ、下半部が同心円状タタキ目痕を残す。6は碗状の坏で、口径14,4cm、器高6,2cm。調整は、外面が口縁部のナデ以外はヘラケズリで、内面が不定方向の粗いナデである。7は甕で、口径16,0cm。口縁部は短く「く」の字に単純に外反する。8は甑形土器の下端部破片である。推定径15,4cm。9は甕の小破片で、口縁は「く」の字に外反する。10は甕で、推定口径27,0cm、胴部最大径25,6cm、器高25cmほどである。口縁部は「く」



第10図　A区ＳＩ01出土遺物実測図（1：3）

の字に外反する単純口縁である。調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、以下は外面が縦方向のハケメないしは不定方向のナデである。これら須恵器の時期は、古墳時代末期頃のものとみられることから、ＳＩ01もこの時期のものと考えられる。

ＳＩ02（第11図、図版６）

調査区中央部南寄り、ＳＩ01の西7.5ｍに位置する平面プラン方形の竪穴住居跡である。規模は長さ3.6ｍ・幅3.2ｍ・深さ0.2ｍ。この遺構では、北東辺中央壁際に造り付けられた石組みカマドと、そこから斜面を利用して設けられた煙道、南隅のピットＰ.１とＰ.２、北隅中央寄りのＰ.３、中央よりやや北西寄りの焼土面、そして住居跡北東辺の外側に煙道を間に挟むように掘られた２つのピットＰ.４とＰ.５、を検出した。

石組みカマドは、板状の石を立てて側壁とし、これを全体に粘土で覆って造られている。炊き口部分の幅は、底部が20cm、天井部は推定で35cmと思われる。

煙道部分は、住居跡側壁を深く削り込んだ中に板状の石を並び立てて側壁とし、その上に天井石を被せ、そして粘土でもってしっかりと覆込めして造られている。側壁石及び天井石に使用されているのはほぼ40～55cmの長さの板状の石である。

ピットの規模は、Ｐ.１（上端径40～60cm・下端径20～35cm・深さ8cm）、Ｐ.２（上端径30～70cm・下端径20～45cm・深さ15cm）、Ｐ.３（上端径20cm・下端径8～15cm・深さ11cm）、Ｐ.４（上端径30～35cm・下端径10cm・深さ47cm）、Ｐ.５（上端径25～35cm・下端径10～12cm・深さ20cm）である。

遺物については、住居跡内から小範囲に須恵器と土師器の小片が出土した。

ＳＩ02出土遺物（第13図、図版38）

出土遺物には、須恵器、土師器がある。１～３が須恵器、４～10が土師器である。１は、蓋坏の蓋で、内面にかえりを有している。推定径12,8cm。調整は、外面が頂部からナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデと続き、内面は全体回転ナデである。天井部外面には、焼成前に刻まれた「×」のヘラ記号が認められる。２は坏の身と考えられる小破片で、推定口径12,4cmである。調整は内外面とも回転ナデである。３は甕の体部破片で、外面は格子状タタキメ、内面が同心円状タタキメ痕を残す。４～９は甕の破片で、いずれも口縁部は単純に外反するタイプのものである。調整は、基本的に体部外面がナデで内面がヘラケズリであるが、７・８は口縁内面側がハケメ風のナデである。10は甑形土器の小破片である。

ＳＩ03（第14図）

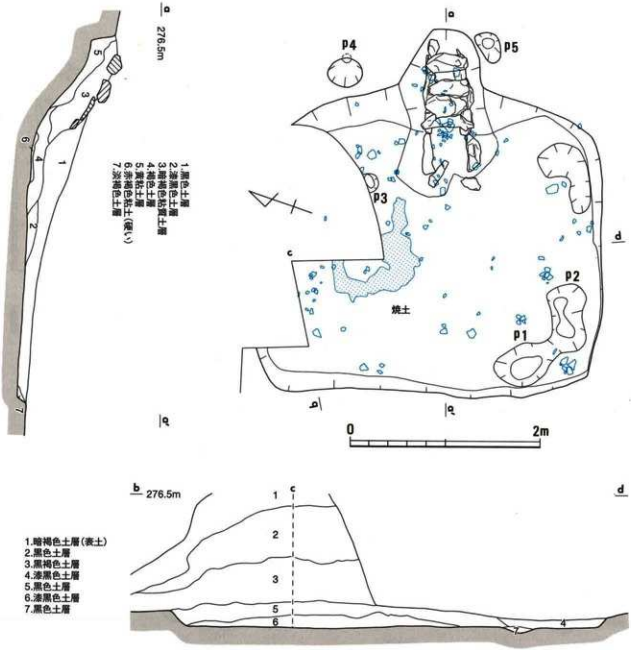
調査区中央部北寄りで検出した。ＳＩ01の北31ｍのところに位置する、平面プランが方形の竪穴住居跡である。側壁が残存するのは南西辺１辺だけであり、規模は１辺2.9ｍ・深さ20cmである。この遺構に伴う遺物の出土はなかった。

ＳＢ01・ＳＢ02（第15・16図、図版８）

ＳＢ01は、調査区中央部南寄り、ＳＩ01の北10ｍに位置する、長軸を北々西に向けたＰ.１－Ｐ.３－Ｐ.４－Ｐ.７で構成される１×２間の掘立柱建物跡である。この場合、桁行はＰ.１－Ｐ.３（２

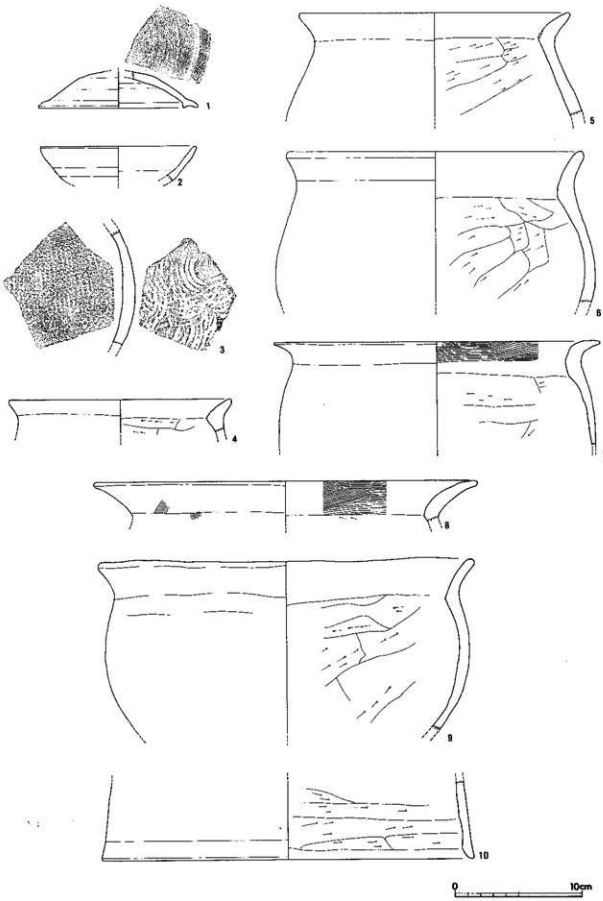
間・4.8m)、P.3－P.4（1間・4m)、梁行はP.4－P.7（2間・4.5m)、P.7－P.1（1間・4.5m）の規模である。柱穴は、支柱の6穴中4穴が斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれているのが特徴で、その一番低い部分に柱が立てられていたものと考えられる。桁行、梁行の支柱となるそれぞれの柱穴の規模は、P.1（上端径50～110cm・下端径32～55cm・深さ55cm)、P.2（上端径50～95cm・下端径27～47cm・深さ60cm)、P.3（上端径70～100cm・下端径37～42cm・深さ62cm)、P.4（上端径55～135cm・下端径29～35cm・深さcm30)、P.6（上端径75～150cm・下端径48～62cm・深さ85cm)、P.7（上端径75～170cm・下端径30～50cm・深さ115cm）であり、また建物に付随する柱穴としてP.5（上端径65～70cm・下端径27～32cm・深さ50cm）も考えられる。

SB02は、調査区中央部南寄りで検出した。SB01と重なり合って、長軸を真北に向けたP.8－P.10－P.11－P.14で構成される1×2ないし3間の掘立柱建物跡である。この場合、桁行はP



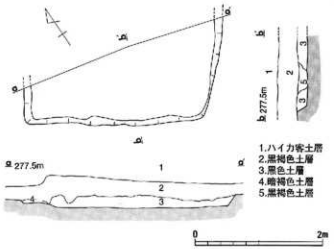
第11図　A区SI02遺構実測図（1：40)

第12図　A区ＳＩ02カマド遺構実測図（１：30）

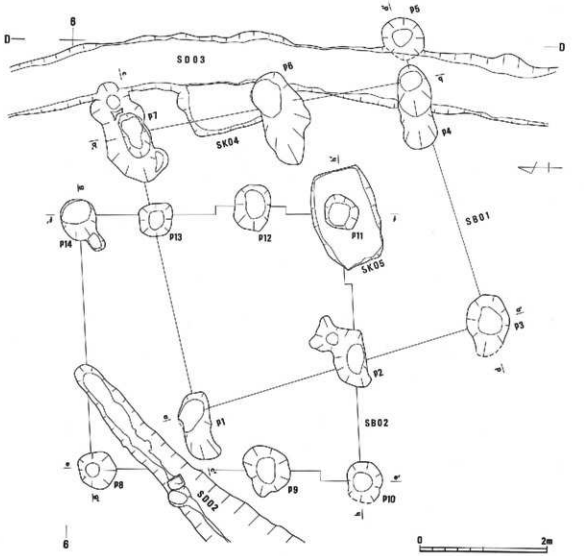


第13図　A区ＳＩ02出土遺物実測図（１：３）

.8－P.10（2間・4.25m）、P.10－P.11（1間・4.25m）、梁行はP.11－P.14（3間・4.2m）、P.14－P.8（1間・4m）の規模である。SB01の柱穴とは異なって、支柱の7穴中、P.14の1穴のみが斜面の低い側から高い側に向かって斜めに掘り込まれている。桁行、梁行の支柱となるそれぞれの柱穴の規模は、P.8（上端径60cm・下端径22cm・深さ30cm）、P.9（上端径67～80cm・下端径30～42cm・深さ55cm）、P.



第14図　A区ＳＩ03遺構実測図（1：60）



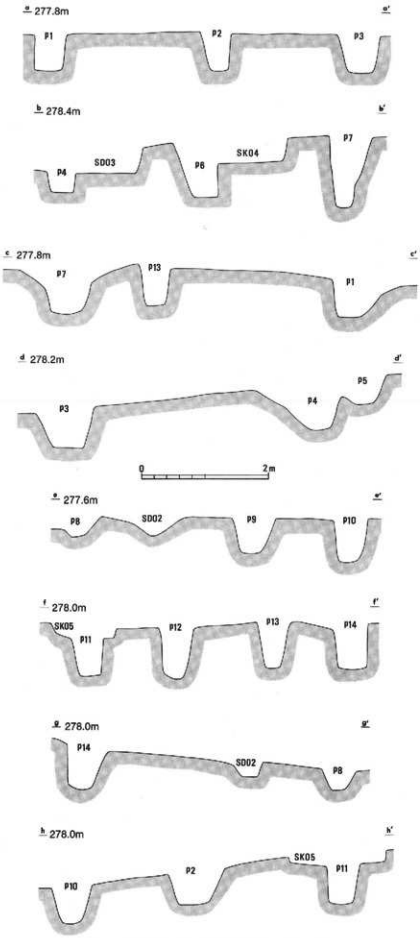
第15図　A区ＳＢ01・02遺構実測図（1：60）

10（上端径55～65cm・下端径30cm・深さ65cm）、P.11（上端径55cm・下端径33～36cm・深さ75cm）、P.12（上端径55～70cm・下端径30～45cm・深さ80cm）、P.13（上端径53cm・下端径23～30cm・深さ70cm）、P.14（上端径58～95cm・下端径35～48cm・深さ70cm）である。

これら2つの遺構に伴う遺物の出土はなく、遺構の明確な時期については不明だが、類例から判断すれば、近世以降のものと推定できる。なお、ピットの切り合い関係から、SB01はSD03より新しくSK04よりは古く、またSB02はSK05よりも古い。

ピット列1・ピット列2（第17図）

ピット列1は、調査区南部で検出した遺構である。3穴のピットP.1、P.2、P.3が北西方向に一直線に並ぶ。P.1－P.3の心々間の距離は2.9m。ま



第16図　A区SB01・02遺物断面図（1：60）

た、それぞれのピットの規模は、P.1（上端径50～60cm・下端径52～65cm・深さ35cm）、P.2（上端径52～64cm・下端径32cm・深さ26cm）、P.3（上端径53cm・下端径34cm・深さ60cm）である。

ピット列2は、調査区南部、ピット列2の南3.2mに位置して検出した遺構である。ピット列1と平行に北西方向に2次のピットP.4、P.5が並ぶ。このP.4、P.5はそれぞれ、ピット列1のP.2、P.3と対応している（P.1と対応するものもあったかもしれないがSD01のため不明である）。可能性としてはピット列1とピット列2で1つの掘立柱建物を構成していたとも考えられる。P.4－P.5の心々間の距離は1.5m。また、それぞれのピットの規模は、P.4（上端径43～68cm・下端径28～40cm・深さ30cm）、P.5（上端径50cm・下端径20cm・深さ60cm）である。前述の通り、P.5－P.4の延長線上のピットがSD01によって破壊されている可能性があり、もしそうならばSD01より古い時期の遺構ということになる。

いずれのピット列からも遺物の出土は認められなかった。

SK01およびその出土遺物（第18・19図、図版9）

SK01は、調査区中央部北寄りで検出した遺構で、SB01の北東28mに位置する円形の土坑である。規模は上端径1.35m・下端径1.2m・深さ0.3mであり、土坑中からは古墳時代の終わり頃と思われる土師器片が出土した。甕の体部にあたり、内面にはヘラケズリ、外面はナデとハケ目が施されている。特徴として、外面頸部下にヘラ状工具で「口」字状の記号がかかれている。

SK02（第18図、図版7）

SK02は、調査区中央部北寄り、SK02の南側に位置する円形の土坑である。規模は上端径0.72～0.79m・下端径0.56～0.62m・深さ0.23mであり、土坑中からは古墳時代の終わり頃と思われる土師器片が出土している。

SK03（第20図）

調査区中央部南寄りで検出した遺構で、SI01の北西5mに位置する細長い長方形の土坑である。規模は、長さ2.7m・幅1.05m・深さ0.25mで、土坑中からはフイゴの羽口片1点（第38図8、図版61）と7点の鉄滓が出土した。この点を参考にすれば、SK03は江戸時代の製鉄（鍛冶か）関連の遺構かと考えられる。なお後述のSD01を切っていることから、SD01より新しい時期の遺構である。

SK04・05（第15図、図版8）

SK04・05は、調査区中央部南寄りで検出した遺構で、SB01・SB02と重なり合う土坑である。

SK04は、SB01－P.6、SD03と切り合い関係にある土坑で、残存部分は長さ105cm・幅80cm・深さ37cmの長方形を呈している。このSK04は、SD03、SB01－P.6によって切られていることから、SD03及びSB01よりも新しい時期の遺構である。

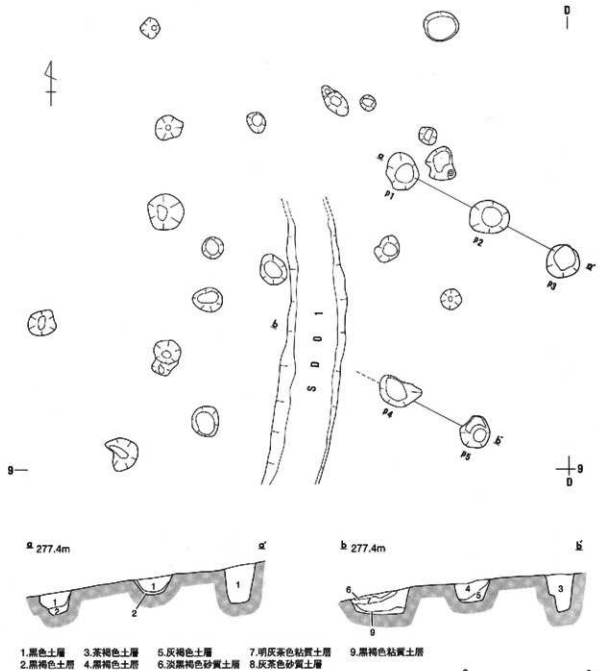
SK05は、SB02－P.11と切り合い関係にある土坑で、長さ158cm・幅103cm・深さ20cmの長方形を呈している。このSK05は、SB02－P.11によって切られていることから、SB02よりは新しい時期の遺構である。

ＳＫ06（第21図、図版９）

調査区北部で検出した遺構で、長楕円形を呈した集石土坑である。規模は長さ2.9ｍ・幅1.6ｍ・深さ0.7ｍであり、深さ0.45ｍの位置まで焼石がたっぷり詰まっていた。焼石の下には多数の木炭片と0.2～0.4ｍの厚さで炭層が堆積しており、土坑内部で火がたかれ、その中に多数の山石が投入されて焼石となったものであることが分かる。遺構に伴う遺物の出土は認められなかった。

ＳＤ01・02・03（第17図）

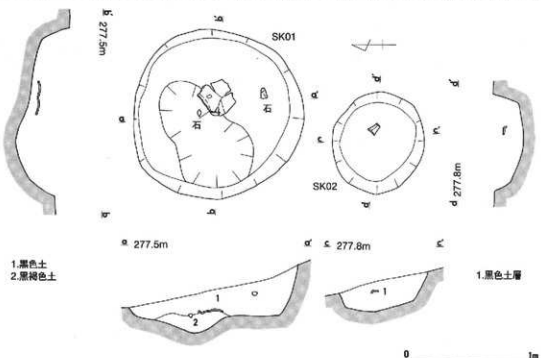
ＳＤ01は、当Ａ区及び神原Ⅱ遺跡１区・２区を通って流れていた溝の跡である。規模は上端幅が65～100㎝、下端幅が50～70㎝で、この溝底面の当Ａ区部分での標高は276.4ｍであり、神原Ⅱ遺跡



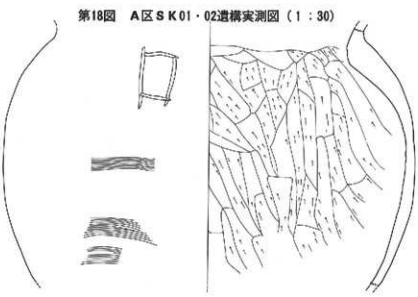
第17図　Ａ区南端ピット群実測図（１：60）

1区・2区部分ではいずれもそれは276.3ｍであることから、水は南から北にかけてのほんのわずかの傾斜を流れていたことが分かる。なお、溝内に堆積した土砂についての詳細は神原Ⅱ遺跡2区の項目で述べている。出土遺物については、ほぼ最南端部の堆積土中から、底面より17㎝浮いた状態で陶器片（第35図2、図版60）が出土した。それは肥前系の、1600～1610年代のものであり、この点を参考にすれば、その時期前後にこの溝が利用されていた可能性も考えられる。

ＳＤ02は、調査区中央部、ＳＢ02の南西6.5ｍの地点でＳＤ01と交差する溝の跡である。規模は上端幅40～120㎝・下端幅20～50㎝のＶ字状をしており、底面の標高は北端部277.2ｍ・南端部275.1ｍであり、北から南への急傾斜であったことが分かる。出土遺物については、ＳＤ01と交差するところから南へ2ｍ地点の溝内堆積土中から古墳時代終わり頃と考えられる須恵器の砕片が出土し



第18図　A区ＳＫ01・02遺構実測図（1：30）



第19図　A区ＳＫ01出土遺物実測図（1：3）

た。これを参考にすれば、ＳＤ02はＳＩ01、ＳＩ02と関連し、同時期に利用されていた溝だと考えられる。

ＳＤ03は、ＳＢ01の東側を南北に流れていた溝の跡である。規模は上端幅が80～135㎝、下端幅が55～105㎝で、底面の標高は北端部277.7ｍ・南端部277.4ｍであり、北から南への傾斜であったことが分かる。出土遺物については、ほぼ北端の地点で底面より15～20㎝浮いた状態で11点のフイゴ羽口片（第37図１・２・３・４、第38図９・10・12、図版61）が出土した。

なお、遺構どうしの切り合い関係から、ＳＤ01はＳＤ02より新しく、ＳＫ03よりは古い。またＳＤ03はＳＢ01、ＳＫ04よりも古いことが知られた。

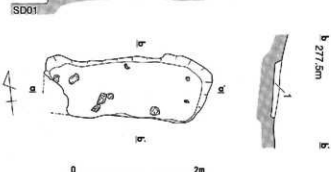
鉄滓溜まり（第22図）

調査区中央部南西寄りで検出した遺構で、ＳＤ01とＳＤ02が交差する地点に位置する。長さ3.1ｍ・幅1.95ｍ・厚さ14㎝の範囲に、多数の鉄滓（２㎝程度の小さなものから大きなもので35㎝程のものまで）と６点のフイゴ羽口片（第38図５・６・７・11、図版61）が集積していた。この鉄滓溜まりは、ＳＤ01及びＳＤ02の堆積層よりも上層にあるため、それらよりも新しい時期のものであるといえる。

⑵　第Ⅰ黒色土層出土の遺物

縄文土器（第23図、図版41）

１～２は浅鉢である。１は山形口縁で、調整は内外面ともミガキで、口唇に刻目が、内面には沈線が施されている。また、外面から穿孔されている。２は体部で、調整は内面はケズリ後丁寧なナデ、外面はケズリ後ミガキである。３～11は突帯文土器である。３～５・７～10は口唇下に刻目突帯文、６は二条突帯の胴部で刻目を有す。11は口唇下に突帯文を有し、調整は３～６・８～９・11は内外面ともナデ、７は内面と口唇外面はナデ、外面はケズリ、10は内面はケズリ後ナデ、口唇内面から外面はナデである。12～13は、粗製深鉢の口縁である。12は、調整が内外面はナデ、口唇はやや面取りぎみのナデである。13は内外面はナデによる調整がされ、また内面に沈線が施されている。14は内外面にナデと胴部に対して縦位に貼り付けられた突帯が施されている。15は丸みを帯び内湾する口縁と丸底をもつ碗状の浅鉢で、調整は内外面がケズリ、口唇はナデである。16・17は底部片である。調整は、16が外面にミガキに近い横方向のナデ、底部はナデで、内面もナデだと思われる。17は内外面はナデ、底部はミガキである。



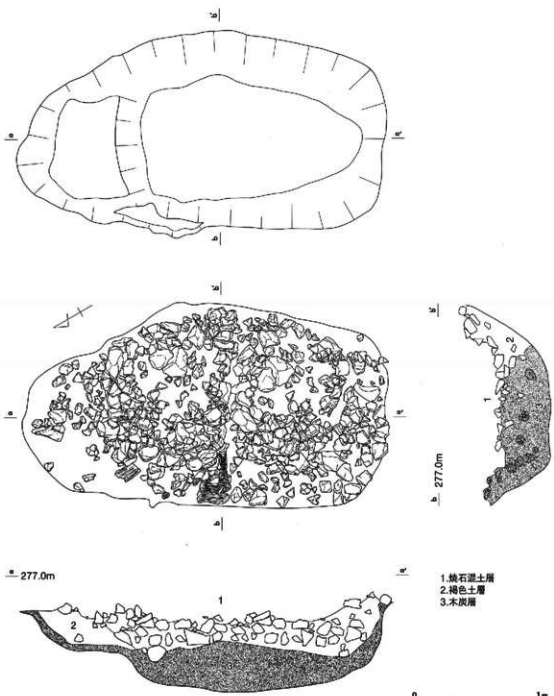
第20図　Ａ区ＳＫ03実測図（１：60、遺物は鉄滓）

石器類（第24図、図版62）

磨石、砥石、石皿が出土している。１は重量は798.21ｇ、長さは12㎝、幅は8.1㎝、厚さは5.7㎝である。２は重

量は738.96ｇ、長さは9.7㎝、幅は8.6㎝、厚さは6.1㎝である。３は重量は333.55ｇ、長さは11.3㎝、厚さは5.9㎝である。４は重量は887.03ｇ、幅は8.9㎝、厚さは６㎝である。５は重量は80.0ｇ、長さは7.7㎝、幅は9.2㎝、厚さは7.3㎝である。６は重量は4.6kg、長さは22.3㎝、幅は24.7㎝、厚さは6.8㎝である。

石材は、１と４は花崗岩、２は玉分岩、３は斑晶質安山岩、５は流紋岩質凝灰岩である。６は細粒の花崗岩（アップライト）と思われる。また、１と２は３面に、３と６は両面に、４は片面に磨面をもっている。５は現状で９面の砥面が確認され、その内３面には、何条かの筋状の砥面が認められる。

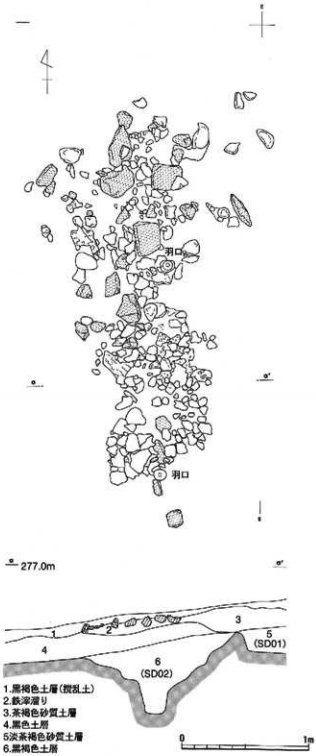


第21図　A区ＳＫ06遺構実測図（１：30）

弥生土器（第26・27・28・29図、図版53・54）

第26図は、1が中期の甕片、2～5・10～15・17～18が後期の甕片、6が後期の壺片、7が後期の鼓形器台片、8～9が高坏片である。1と10の調整は横ナデとハケ目で、口縁に凹線文を有する。3～5・11・15の調整は横ナデ、ケズリで、凹線文がみられる。2の調整はナデとケズリで、凹線文・横ナデ・クシ状工具による刺突文がみられる。12の調整はナデとケズリ、ケズリ後ナデで、凹線文がみられる。13の調整は横ナデとヘラケズリで、凹線文・板状工具による斜行刺突文がみられる。14の調整は横ナデとケズリで、凹線文・2枚貝による連続刺突文がみられる。17の調整はケズリとケズリ後ナデ、横ナデで、凹線文がみられる。18の調整は横ナデ・ケズリ・ナデで、凹線文・斜行刺突文がみられる。6はふくらんだ胴部で、調整は内外面にナデ、また外面には凹線および櫛状工具による刺突文・竹管文・綾杉文がみられる。7は脚台部にあたり、調整は、内面はケズリ、外面はナデと横ナデである。8は脚部にはナデによる調整がみられるが、坏部は風化が著しいため不明である。9は脚部にあたり、調整は、横方向のケズリとナデである。16は甕片で、調整はナデと横ナデ、文様は凹線文・刺突文が施されているが、時期は不明である。

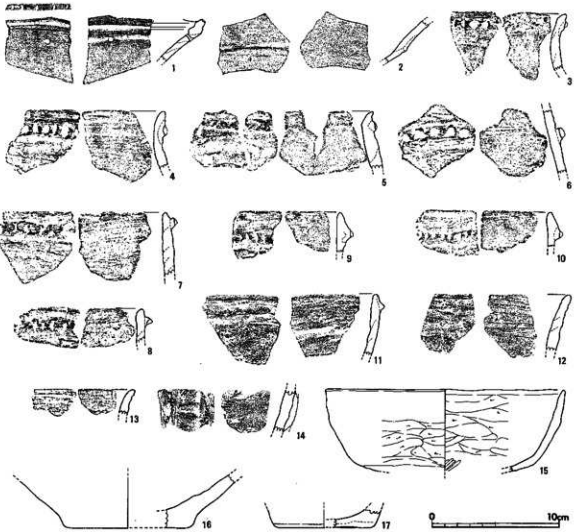
第27図は、1～5・7～9は後期の弥生土器の甕である。1は調整に横ナデ、文様に櫛状工具による沈線がみられる。2・7・9は小片で、ナデとケズリによる調整と、櫛状工具による浅い平行凹線がみられる。3の調整はヘラケズリ・横ナデ・ハケ目後ナデ・指頭圧痕である。4は小片で、ケズリ後ナデ・ナデによる調整と、櫛状工具による浅い平行沈線がみられる。5は小片で、横ナデ・ケズリによる調整と、5本の擬凹線・羽状文がみられる。8は小片で、ナデ調整と櫛状工具による浅い平行沈線がみられる。6は土師器



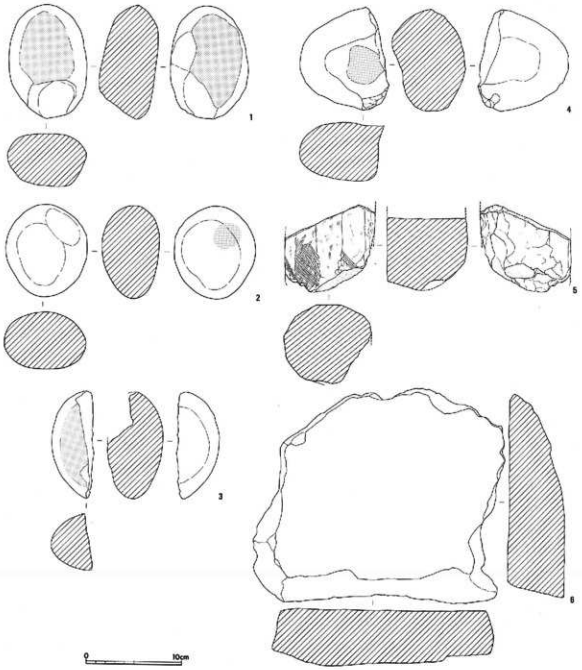
第22図　A区鉄滓溜り出土状況図（1：30、網かけは石を表わす）

の甕片である。ケズリと横ナデ、ハケ目による調整がみられる。

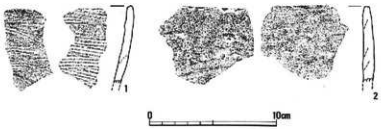
第28図はすべて小片である。1～2は波状文を有する口縁で、後期以降のものと考えられる。器種は、2は甕の可能性がある。3は壺の口縁と思われ、内面はケズリ調整の可能性があり、外面はナデ調整の後に櫛状工具で施文されている。4は胴部で、内面にケズリ調整が見られるため、後期のものと思われる。また、外面の施文は波状文と思われ、石見地方のものと類似している。5～6・8は胴部で、沈線の間に刻目文と鋸歯文がそれぞれ施され、前期の可能性がある。5・8は器種は壺と思われる。7は胴部で、連続したヘラがきの羽状文が施されていることから、前期のものと思われる。9～10・12は重孤文を有し、内面にケズリ調整がなされている可能性があることから、後期のものと思われる。9・10は壺と考えられる。11は壺の胴部と思われ、外面の施文は波状文であろう。13～15は凹線文と刺突文を有する「塩町式」のもので、時期は中期後葉ないし後期初頭と考えられる。13・15は肩部に刻目が入ることから甕ではないかと考えられる。その他の調整は、13は、横ナデ・ナデ・ミガキである。14は横方向のミガキと縦方向のハケ目である。15は横ナデとハケ目である。16は後期の壺の胴部と考えられ、内面にはナデとケズリ後ナデによる調整が、外面には波状文と沈線・縦方向のヘラがき沈線がある。17は壺の胴部と思われ、内面はナデとケズリによる調整が、外面には横ナデ調整と櫛状工具による波状文が施されている。18は器台の脚端部の可能



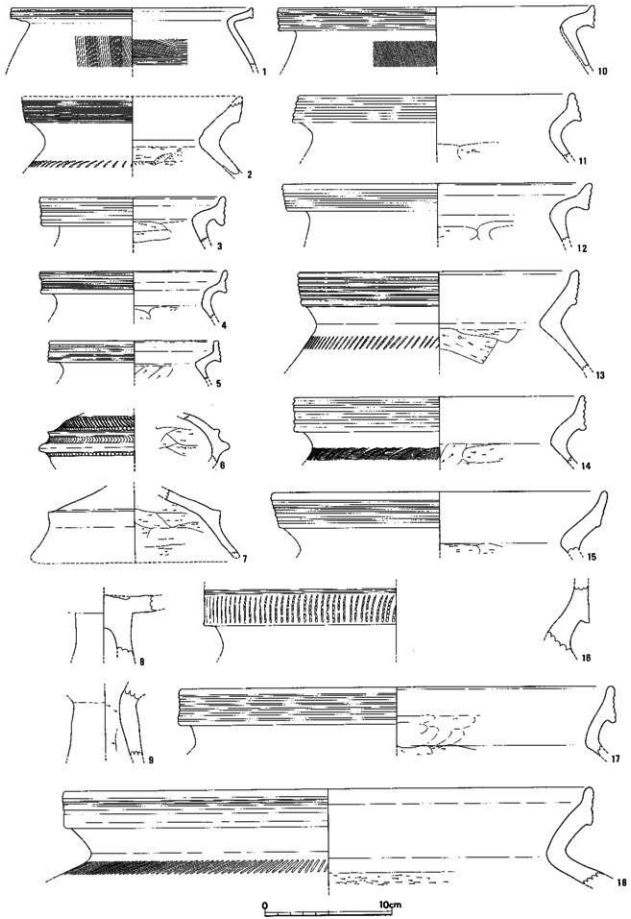
第23図　A区第1黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）



第24図　A区第１黒色土層出土石器実測図（１：４）



第25図　A区第２黒色土層出土縄文土器実測図（１：３）



第26図　A区出土弥生土器実測図（1）（1：3）

性があり、内面にはナデかケズリによる調整が、外面には横ナデ調整と櫛状工具による波状文が施されている。

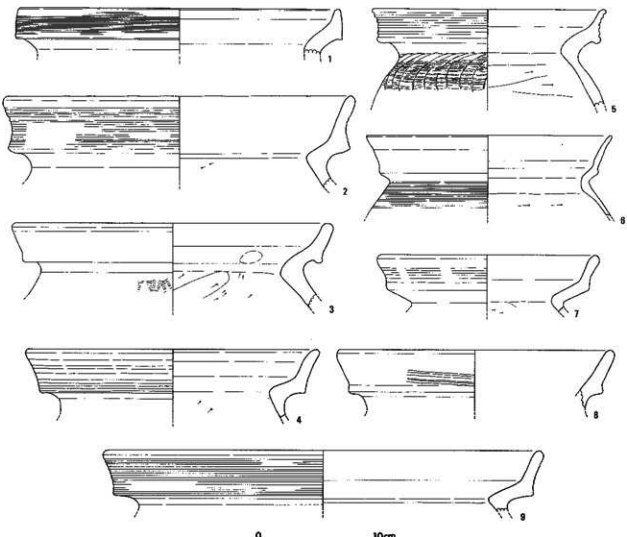
第29図はすべて平底の底部片である。調整は、1～3はおおむねケズリとナデである。4は外面にミガキ、5は外面に縦方向のハケ目がみられる。

土師器（第30・31・32図、図版57・58）

第30図1は丸みをもった坏部を有する高坏で、脚部外面に指押圧痕、坏部外面にはミガキ調整がみられる。赤色塗彩されていることから、5世紀後半以降のものと考えられる。2～6は坏で、6は高台付である。いずれも横ナデ（4はヘラケズリも）調整が施され、放射状や螺旋状の暗文・赤色塗彩がなされている。いずれも8世紀代のものと思われる。

第31図はすべて6世紀後半以降の甕で、主な調整は横ナデ・ヘラケズリである。2～3の外面にはススが付着している。

第32図はすべて甕で、主な調整は横ナデ・ヘラケズリ・ハケ目である。また、9・11の外面にはススが付着している。いずれも胴部のふくらみは中心より下にあり、6世紀後半以降のものと考えられる。



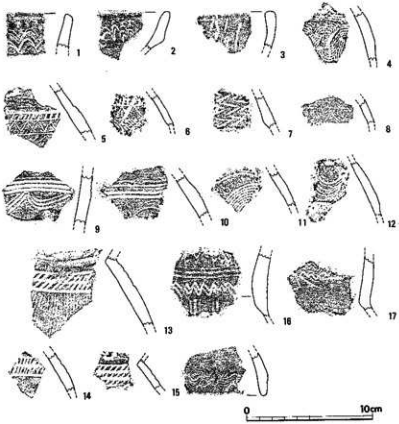
第27図　A区出土弥生土器実測図（2）（1：3）

須恵器（第33図、図版58）

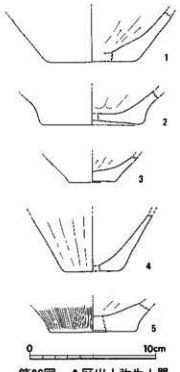
1～8は坏蓋である。1・2は頂部に宝珠状のつまみをもち、内面にかえりを有するものである。1の内面には、薄く墨痕の跡が認められ、転用硯として利用されていた可能性がある。そのために宝珠状のつまみも欠いているものと思われる。3～5は、頂部に輪状のつまみを有する破片である。端部の破片である7・8は内面にかえりを有するもの、6はかえりではなく端部を折り返したものである。9～17は、坏の身である。9は蓋坏の坏身で、直立気味の立ち上がりを有し、器壁は薄く作られ、体部は深い。受け部の作りもシャープで、外面の回転ヘラケズリによる調整はかなり上位まで及んでいる。10～12は高台付の坏で、いずれも「ハ」の字状に広がる。10の底部外面には、径3㎜ほどの竹管文が押され、また、11には焼成前に施された「×」状のヘラ記号が認められる。13・14は蓋坏の坏身で、立ち上がりが低く内傾する。15は、ここでは坏身として図示したが、身か蓋かは不明である。16は口縁端部がスッポン口状に屈曲し、すぼまるものであり、17は体部が直線的に外傾するものである。18は高坏の坏部と思われるもので、体部と底部との区別はなく、曲面をなす。19は高坏の脚部である。透かしの痕跡が認められるが、その形状は不明である。20～24は瓶類と見られるもので、20は頸の部分、21は体部の肩の部分、22は体部が最も張る部分、23は体部の下半部分、24は底部片である。25～29は壺・甕類の破片である。いずれも体部の外面には格子状の、また内面には同心円状のタタキ目痕が認められる。口縁部を残す27は、単純口縁である。

陶磁器（第34・35図、図版59・60）

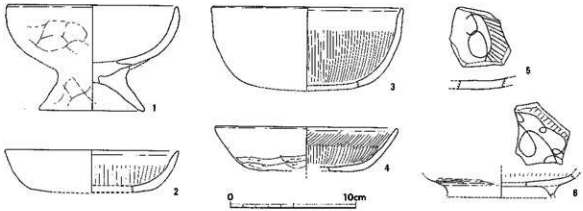
第34図は中世陶磁器類である。1は中国明代末期のもので、口縁内面に文様帯を有する碗である。



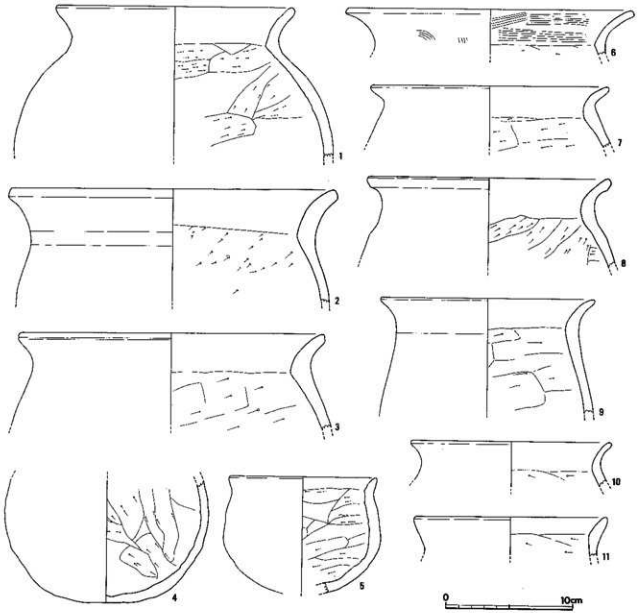
第28図　A区出土弥生土器実測図（3）（1：3）



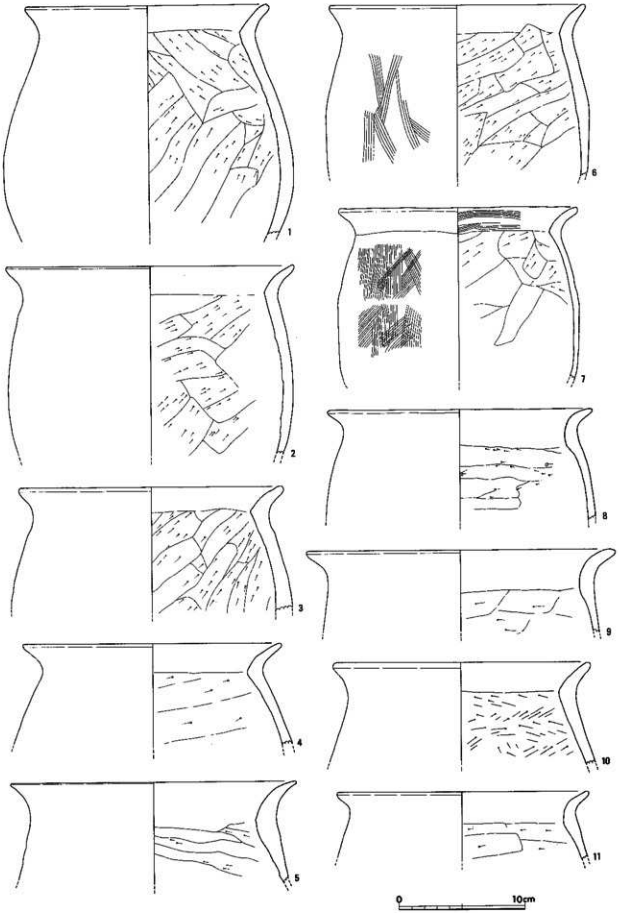
第29図　A区出土弥生土器実測図（4）（1：3）



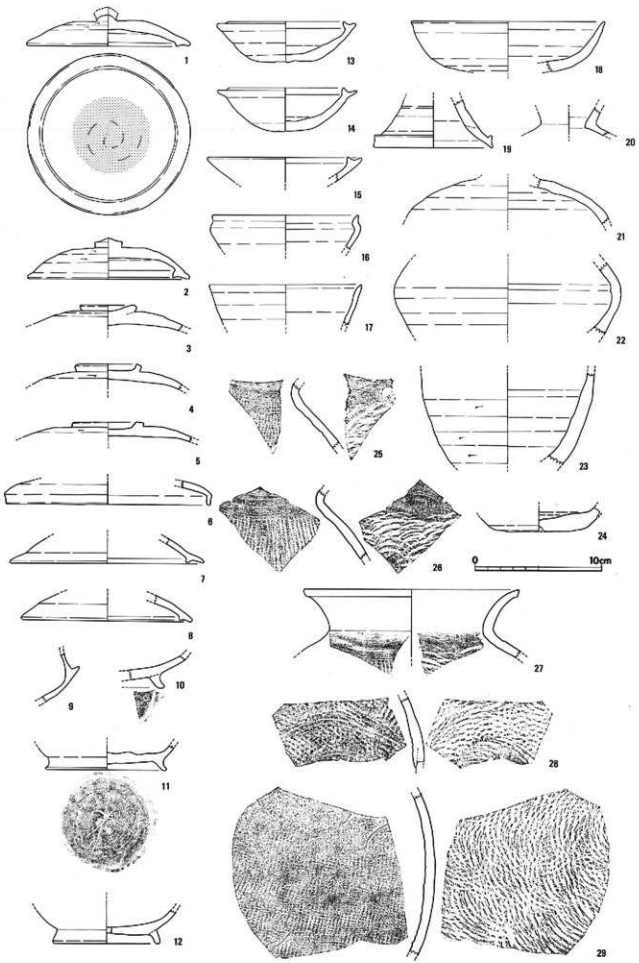
第30図　A区出土土師器実測図（1）（1：3）



第31図　A区出土土師器実測図（2）（1：3）



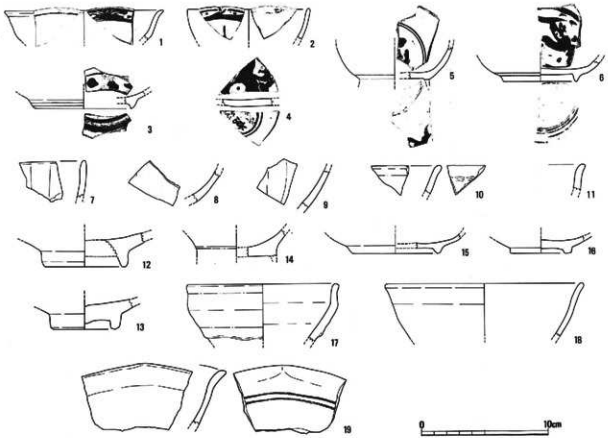
第32図　A区出土土師器実測図（3）（1：3）



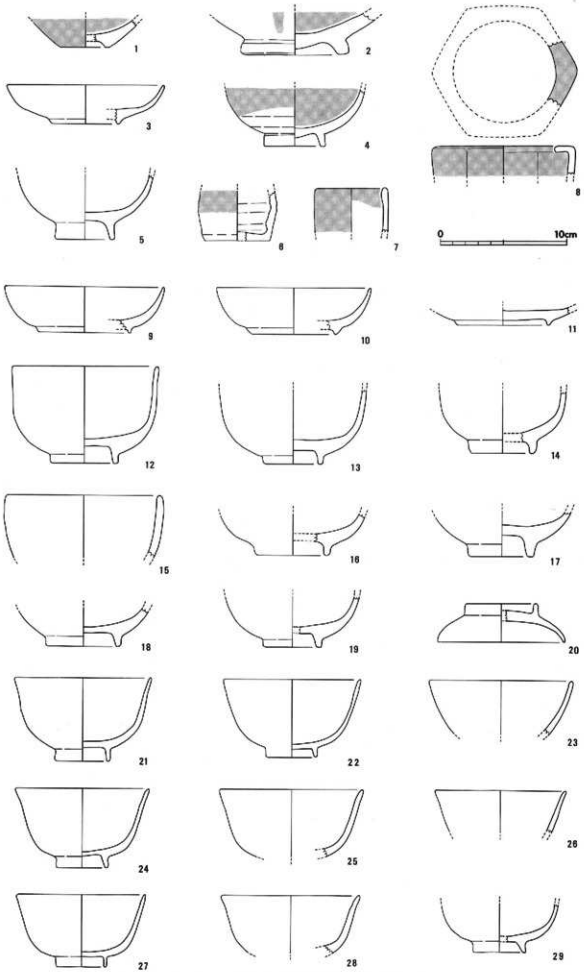
第33図　A区出土須恵器実測図（1：3）

2～6・14は染付で、2・5は碗である。3・6は高台状の底部で、内面に絵模様がみられる。3は中国明代末期のものである。4も中国明代末期のごけ底の皿で、外面に「萬福役□」という文字がみられる。これらが製作された時期および年代は、1は16世紀末、2は16世紀前半から中頃、3～6は16世紀中頃から後半と考えられる。7～9は蓮弁を表した青磁の碗である。7は線書きで簡略化した蓮弁が表されており、淡白緑色釉がかかっている。また、嵌入が少しみられる。8～9は淡緑色釉がかかっている。10は鎬の無い蓮弁が表されており、淡緑灰色釉がかかっている。7～8は15世紀後半から末にかけて、9は14世紀後半のものと考えられる。10は内側に人形が陽刻されている人形手の青磁で、淡緑灰色釉がかかり、15世紀代のものと考えられる。11は青磁の碗の口縁部で、淡白灰緑色釉と淡白緑色釉がかかっており、15世紀代のものと考えられる。12～13は青磁の高台状になった底部で、いずれも15世紀代のものと考えられる。12は淡緑釉が、13は淡緑色釉がかかっている。14はエンゴビエ（ベトナム）の可能性があると思われる染付の底部で、淡透明釉がかかっている。15～16は白磁の高台状になった底部である。15は白濁色釉、16は白淡黄色釉がかかっている。16はえぐりのある皿部をもち、重ね焼きの跡がみられる。15は15世紀代、16は15世紀前半のものと考えられる。17は美濃・瀬戸系の天目茶碗で、白肌色の胎土に茶褐色と黒茶褐色の鉄釉がかかっている。18は白磁の碗で、14世紀か15世紀のものと考えられる。19は青磁で、淡緑茶色釉がかかり、嵌入が見られ、15世紀代のものと考えられる。

第35図は近世の陶磁器類である。1～2は1600年～1610年のもので、陶器の碗である。1は底部以外に淡黄灰色釉がかかっている。2は白灰褐色釉がかかっており、胎土目積の痕跡残る。3～4は17世紀中頃の陶磁器の碗である。3は草花文が施され、4は白灰色釉がかかっている。5～8は



第34図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡出土陶磁器実測図（1）（1：3）



第35図　A区出土近世陶磁器実測図（1：3）

17世紀後半のものである。5は陶器の碗で、色調は淡飴色である。また、全面に嵌入が見られる。6は伊万里窯のもので、茶入れと思われ、黒あめ釉がかかっている。7は器種は不明であるが青磁で、淡明緑色釉がかかっている。8は青磁の香炉で、前面に淡明緑色釉がかかる。9～11は18世紀前半から中頃のものである。9は陶磁器、10は磁器の碗である。11は陶磁器の皿で、見込みにコンニャク印判が押され、釉がかき落とされている。12～19は17世紀後半から18世紀前半の碗である。12～13・17・19は陶胎磁器、14～16は陶磁器、18は磁器である。20～29は19世紀（1810～1868）のものである。20は広東型の碗蓋である。21～29は磁器の端反碗で、24には山水文がみられる。

銅銭（第36図の2、図版61）

1点出土している。上位から右回りに「至」「道」の2文字が認められることから、中国・宋の「至道元寶」の破片と考えられる。「至道元寶」の初鋳年は、995年である。

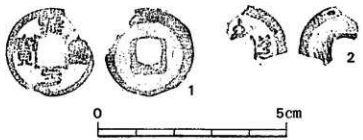
フイゴ羽口（第37・38図、図版61）

フイゴ羽口は、SD03内と鉄滓溜まりから出土している。大小2種類のものがあり、およそ外径10cmほど、内径25cmほどを測るもの（1～4）と、およそ外径80cmほど、内径20cmほどを測るもの（5・6）がある。おそらく、破片7～12も後者に属するものであろう。2と3は比較的はっきりした平坦面を有している。　これらは鍛冶用のフイゴ羽口ではないかと思われる。

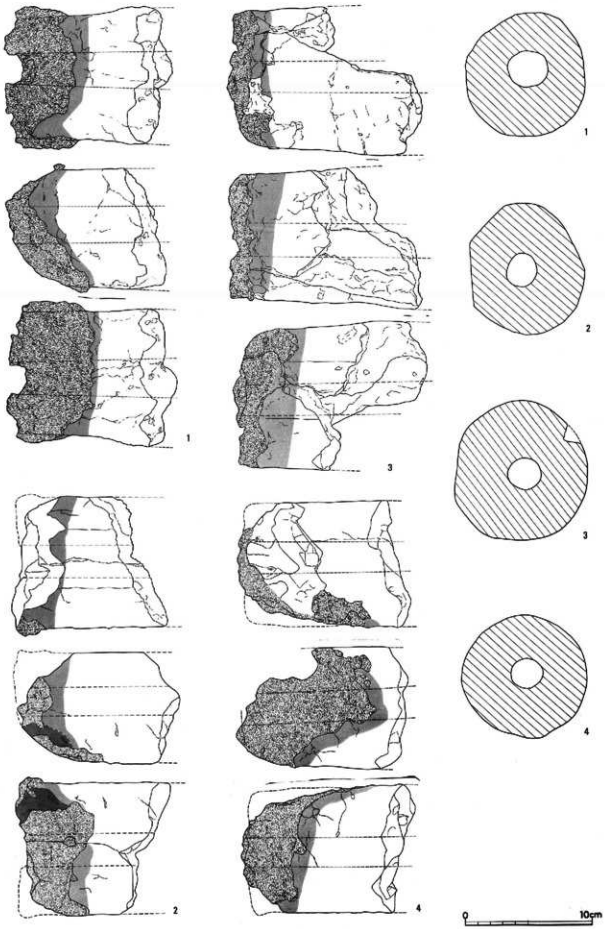
(3)　第2黒色土層出土の遺物

縄文土器（第25図、図版41）

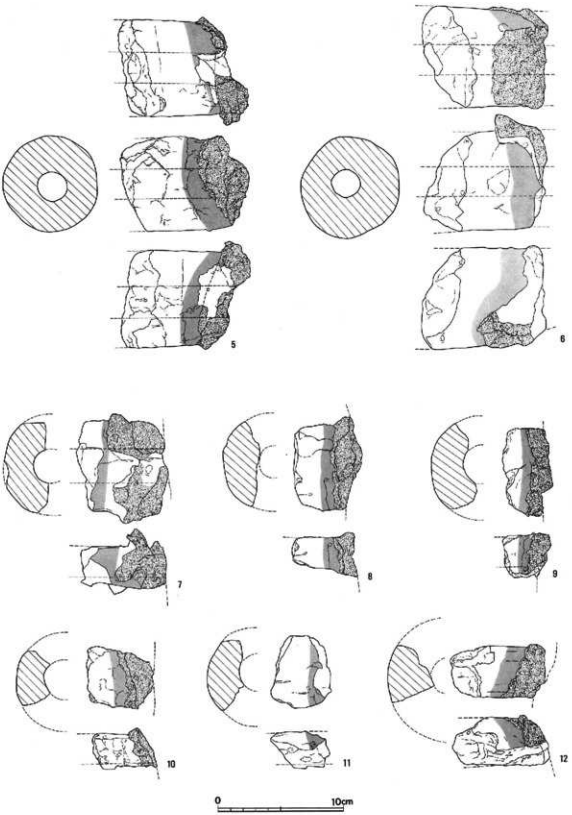
1・2とも粗製深鉢の口縁部片である。1は、内面は二枚貝による横位条痕、口唇はやや面取りぎみのナデ、外面は条痕後ナデがみられる。2は、内外面ともナデで、口唇はやや面取りぎみのナデである。



第36図　神原Ⅰ・Ⅱ遺跡出土銅銭（1：1）



第37図　A区出土フイゴ羽口実測図（1）（1：3）



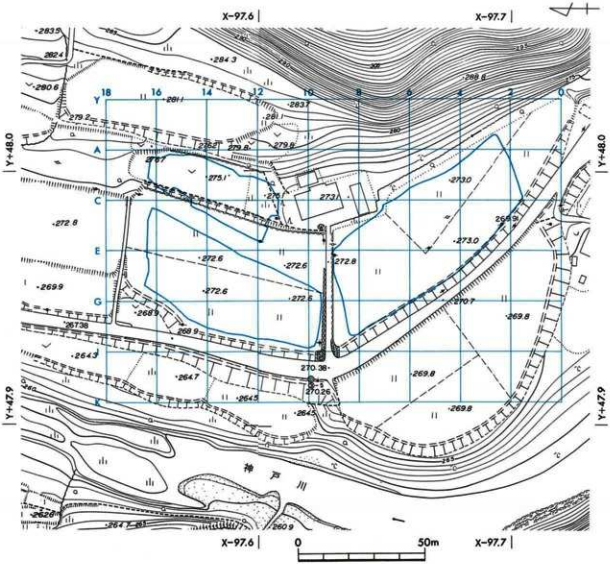
第38図　A区出土フイゴ羽口実測図（2）（1：3）

Ⅳ－2　神原Ⅰ遺跡B区の調査

1．調査の概要（第39～41図）

調査区は、本遺跡の南端、もっとも上流側に位置し、標高273ｍの平坦地で水田として利用されていたところである。調査面積は約2700㎡である。

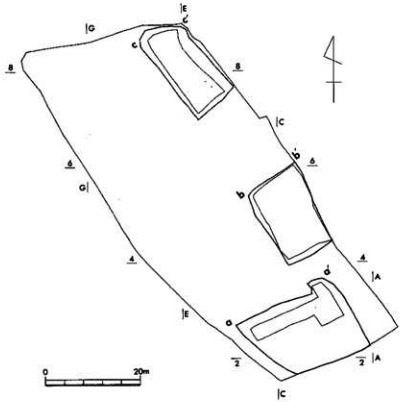
大まかな土層の堆積状況を捉えた地点は、調査区南部のａ－ａ´地点、調査区中央部のｂ－ｂ´地点、調査区北部のｃ－ｃ´地点の３地点である。土層図からわかるように、調査区の土層は、おおむね地表から、第１黒色土層、第１ハイカ層、第２黒色土層、第２ハイカ層、そして第３黒色土層の順に堆積している。この内、ａ－ａ´地点及びｂ－ｂ´地点の層序から考えると、この両地点周辺はもともとは谷筋だったと考えられ、第１ハイカの二次堆積によって現在のような平坦地になったと思われる。それぞれの地点については、まずａ－ａ´地点は、確認できた最下層の第３ハイカ層上に順に、第３黒色土層が50㎝、第２ハイカ層が30㎝、第２黒色土層が10～55㎝、第１ハイカ層が200～620㎝、第１黒色土層が15～40㎝、と堆積している。ｂ－ｂ´地点は、確認できた最下層



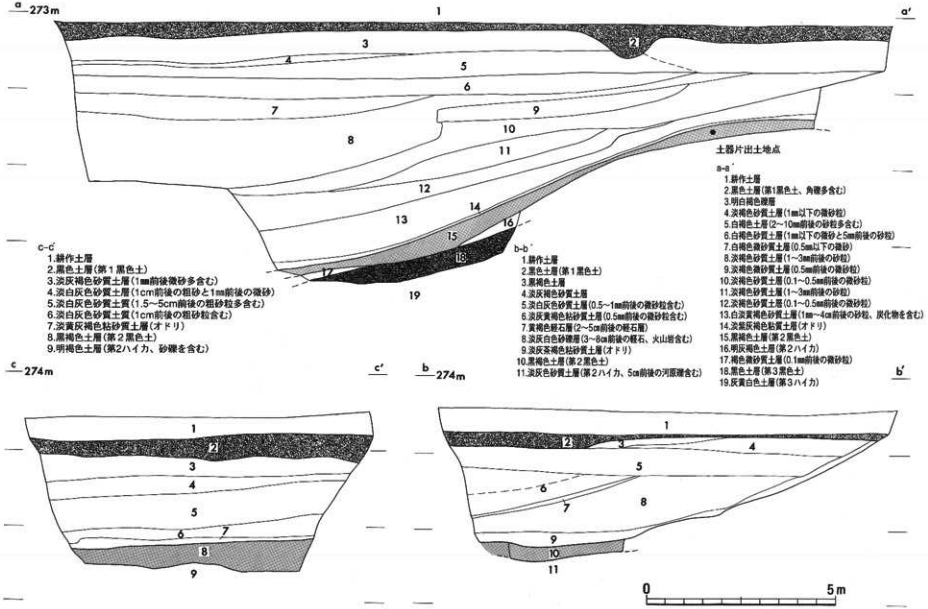
第39図　B～D区調査区設定図（１：1500）

の第２ハイカ層の上に順に、第２黒色土層が35cm、第１ハイカ層が260cm、第１黒色土層が５～40cmであり、ｃ－ｃ´地点は、確認できた最下層の第２ハイカ層の上に順に、第２黒色土層が40～80cm、第１ハイカ層が210～240cm、第１黒色土層が40～70cm、といった堆積状況である。

調査は、調査区の約11パーセントに相当する212㎡について試掘調査を実施することから始めた。その結果、第１黒色土層は、ほぼ全域にわたって近代の水田整備のため広く削平されており、遺構はもとより遺物包含層も認められなかったことから、すぐに第２黒色土層の調査に移ったが、第１ハイカ層も厚く堆積しており、３カ所のトレンチ調査にとどまった。その面積は305㎡ほどであり、結果遺構は検出しなかったが、粗製の縄文土器の細片が数点出土した。



第40図　B区調査区とトレンチ配置図
（１：800、・印：第２黒色土層出土縄文土器）



第41図　B区土層図断面図（1：100）

Ⅳ－3　神原Ⅰ遺跡C区の調査

1．調査の概要（第39・42・43・46図）

調査区は、B区の北側に位置し、標高275ｍほどの丘陵裾部である。調査開始前は畑として利用されていた。調査面積は約1900㎡である。

全体的な土層の堆積状況を記録した地点は、調査区中央部のａ－ａ´地点、調査区中央部南寄りに掘ったトレンチの北壁ｂ－ｂ´地点、及び東壁ｃ－ｃ´地点、の計３地点である。おおむね調査区の土層は、上層から順に、第１黒色土層（厚さ10～20cm）、第１ハイカ層（厚さ110～160cm）、第２黒色土層（厚さ35～60cm）、第２ハイカ層（厚さ45～70cm）、第２黒色土層（厚さ70～100cm）、軽石混土層、と堆積しており、第３ハイカ層は認められなかった。土層堆積状況を観察してみると、第１ハイカ層のところで人為的に掘削がなされ、斜面を水田として利用するために加工されていることがわかる。

調査は、遺物包含層である第２黒色土層まで行った。調査の結果、第１黒色土層・第２黒色土層・第３黒色土層、いずれにも遺構は認められなかった。遺物は、第２黒色土層から少量であるが、粗製の縄文土器片と石鏃などの石器が出土し、また、第３黒色土層からは縄文前期前半以前と考えられる土器片わずか２点出土した。

2．出土遺物

(1)　第２黒色土層出土の遺物

縄文土器（第44図、図版41）

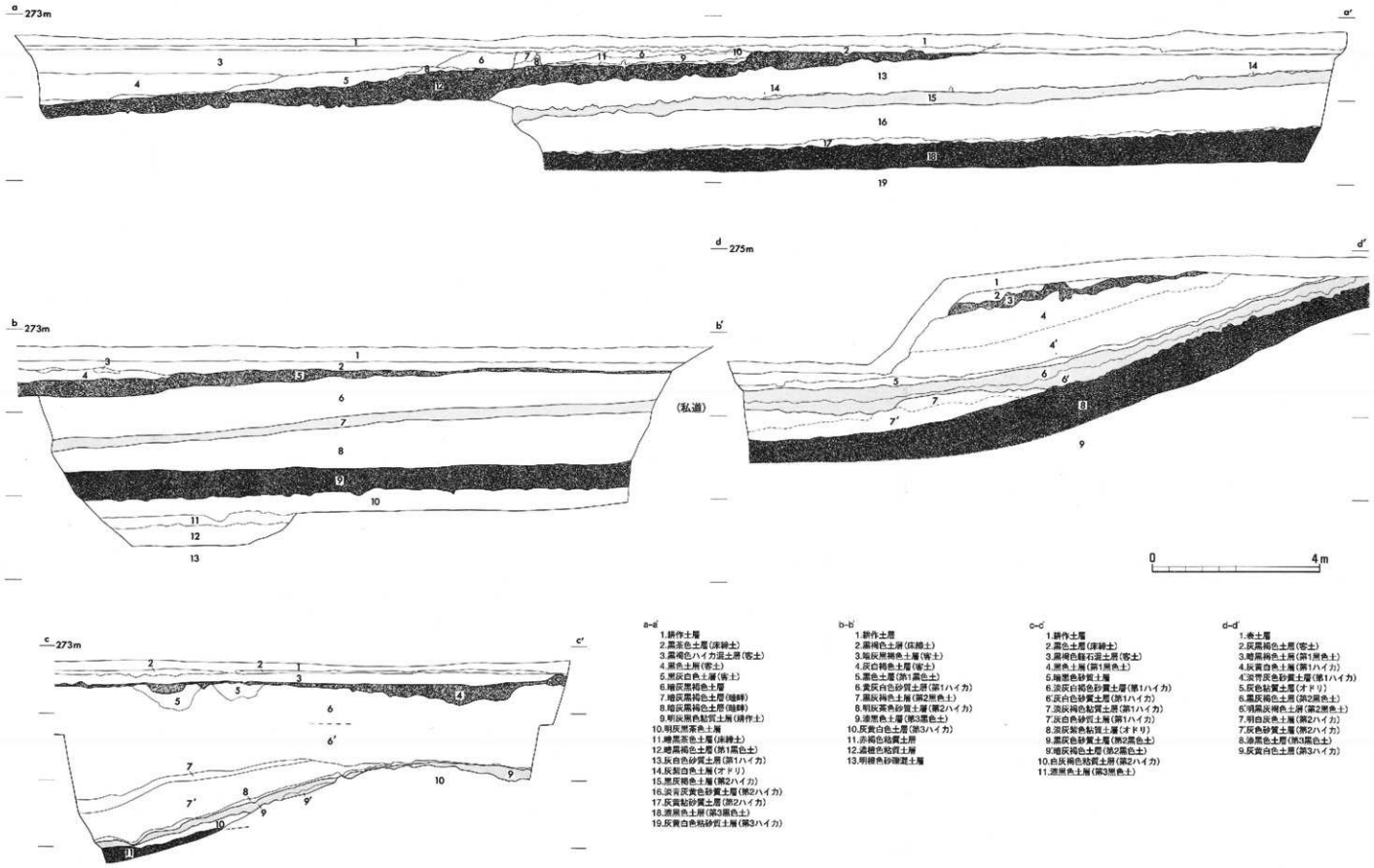
１～３・７は深鉢の口縁部片である。１は、調整は内面は丁寧なナデで、口唇は面取りぎみのナデである。また、外面は縄文が縦走された上に貼付凸帯がつけられ、その後竹管状のもので爪形がつけられている。２は内面にナデ、口唇に面取りぎみのナデによる調整がされ、外面には縄文地に貼付凸帯がつけられ竹管状のもので押し引きされている。３は波状口縁で、調整は内外面はナデ、外面は二枚貝による条痕である。４は口縁部で、調整は内面は二枚貝による横位の条痕のちナデ、口唇はナデ、外面は粗い条痕で、炭化物が付着している。また、１・２は中期前半の船元式である。５は内外面にミガキによる調整がされている。７はバケツ型の深鉢だと思われ、調整はナデである。８は肩がくびれた胴部だと思われ、調整は内面と外面頸部はミガキで、外面胴部には縄文が施されている。後期中頃のものと考えられる。

６・９は浅鉢である。６は口縁部で、内面にはナデ、口唇にはミガキによる調整がされ、また、口唇にはと沈線、外面には縄文が施されている。中津式のものだと考えられる。９は体部で、調整は内外面ともミガキである。

石器類（第45図、図版62）

図示したのは、石鏃３点である。偏平な川原石の両端をかく、打ち欠き石鏃である。１は重量135.29ｇ、長さ8.2cm、幅6.8cm、厚さ1.5cmである。２は重量73.31ｇ、長さ6.95cm、幅4.5cm、厚さ1.7cmである。３は重量49.03ｇ、長さ5.7cm、幅4.75cm、厚さ1.1cmである。

(2)　第３黒色土層出土の遺物



a-a'
1.耕作土層
2.黒褐色土層(床締土)
3.黒褐色ハイカ混土層(客土)
4.黒色土層(客土)
5.黒灰白色土層(客土)
6.暗灰黒褐色土層
7.暗灰黒褐色土層(礫多)
8.暗灰黒褐色土層(礫多)
9.明灰黒色粘質土層(耕作土)
10.明灰黒茶色土層
11.暗黒茶色土層(床締土)
12.暗黒褐色土層(第1黒色土)
13.灰白色砂質土層(第1ハイカ)
14.灰褐白色土層(オドリ)
15.黒灰褐色土層(第2ハイカ)
16.淡灰黄色砂質土層(第2ハイカ)
17.灰黄褐砂質土層(第2ハイカ)
18.濃黒色土層(第3黒色土)
19.灰黄白色粘砂質土層(第3ハイカ)

b-b'
1.耕作土層
2.黒褐色土層(床締土)
3.暗灰黒褐色土層(客土)
4.灰白褐色土層(客土)
5.黒色土層(第1黒色土)
6.黒灰白色砂質土層(第1ハイカ)
7.黒灰褐色土層(第2黒色土)
8.明灰黄色砂質土層(第2ハイカ)
9.濃黒色土層(第3黒色土)
10.灰黄白色土層(第3ハイカ)
11.赤褐色粘質土層
12.濃褐色粘質土層
13.明褐色砂礫混土層

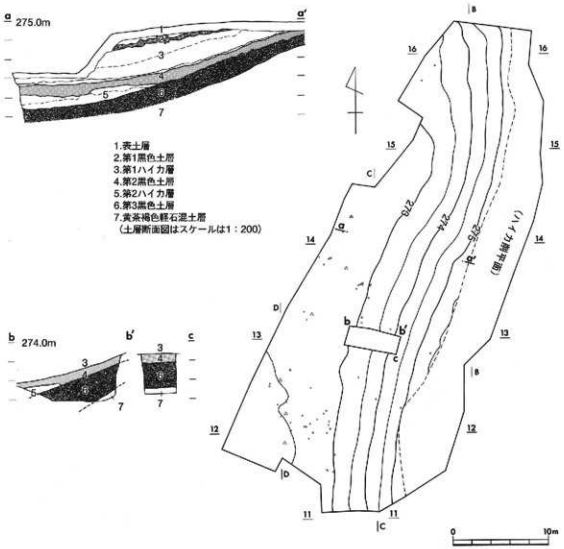
c-c'
1.耕作土層
2.黒色土層(床締土)
3.黒褐色酸石混土層(客土)
4.黒色土層(第1黒色土)
5.暗黒色砂質土層
6.淡灰白褐色砂質土層(第1ハイカ)
6'.灰白色砂質土層(第1ハイカ)
7.淡灰褐色粘質土層(第1ハイカ)
7'.灰白色砂質土層(第1ハイカ)
8.淡灰紫色粘質土層(オドリ)
9.黒灰色砂質土層(第2黒色土)
9'.暗灰褐色土層(第2黒色土)
10.白灰褐色粘質土層(第2ハイカ)
11.濃黒色土層(第3黒色土)

d-d'
1.表土層
2.灰黒褐色土層(客土)
3.暗黒褐色土層(第1黒色土)
4.灰黄白色土層(第1ハイカ)
4'.淡青灰色砂質土層(第1ハイカ)
5.灰色粘質土層(オドリ)
6.黒灰褐色土層(第2黒色土)
6'.明黒灰褐色土層(第2黒色土)
7.明白灰色土層(第2ハイカ)
7'.灰色砂質土層(第2ハイカ)
8.濃黒色土層(第3黒色土)
9.灰黄白色土層(第3ハイカ)

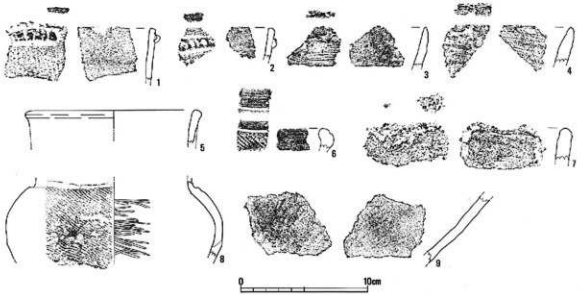
第42図　C・D区土層断面図（1：80）

縄文土器（第46図、図版41）

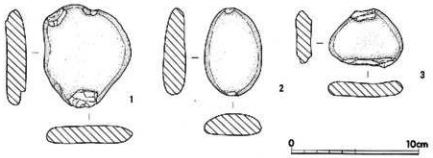
1は深鉢の口縁部片である。内面には二枚貝による横位条痕、口唇にはナデ後刻目、外面には二枚貝による横条痕および二枚貝による斜位条痕後ナデによる調整がされ、また口唇にはナデによる調整の後、刻目が施されている。2は早期末の繊維土器と思われる深鉢の体部片で、調整は内面は二枚貝による横位の条痕、外面は縦位の条痕のちナデによる調整である。



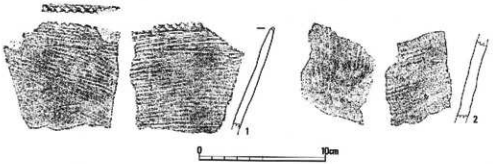
第43図　C区第2黒色土層上面遺物出土分布図（1：400、・印：土器片、△印：石錘）



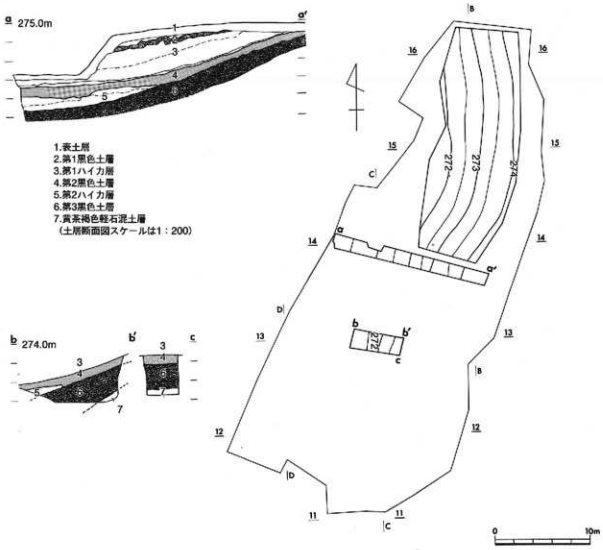
第44図　C区第２黒色土層出土縄文土器実測図（１：３）



第45図　C区第２黒色土層出土石器実測図（１：３）



第46図　C区第３黒色土層出土縄文土器実測図（１：３）



第47図　C区第３黒色土層上面遺物出土分布図（１：400）

Ⅳ－4　神原Ⅰ遺跡D区の調査

1．調査の概要（第39・42・48～50図）

調査区は、C区の西側に位置し、標高は272～273ｍ。緩斜面を階段状に整地して水田利用されていたところである。調査面積は2200㎡である。

全体的な土層の堆積状況を記録した地点は、調査区中央部北寄りのａ－ａ´地点である。層序は、確認できた最下層の第３ハイカ層から順に上へ、第３黒色土層（厚さ50～70cm）、第２ハイカ層（厚さ50～120cm）、第２黒色土層（厚さ20～30cm）、第１ハイカ層（厚さ70～100cm）、第１黒色土層（厚さ10～40cm）、そして緩斜面を水平にするために客土（厚さ30cm）が盛られ、その上が耕作地となっていた。

検出した遺構には、明確なものとしては第３ハイカ層上面で落とし穴１がある。また、同一の層の不整形の浅い落ち込みから剥片石器１点を採取した。

出土した遺物は、第１黒色土層から縄文土器、石器類、弥生土器、須恵器があり、第２黒色土層からは縄文土器、石器類（石錘・石斧・磨石）がある。また、第３黒色土層からは縄文土器、石器類（石錘・磨石・凹石・石皿・剥片石器）がある。

2．遺構と遺物

(1) 第１黒色土層出土の遺物

第48図は、縄文土器の出土分布を表したもので、傾向としては調査区の比較的南側の平坦地に多くみられ、またついで北側の緩斜面である谷地形の部分に少しまとまってみられた。

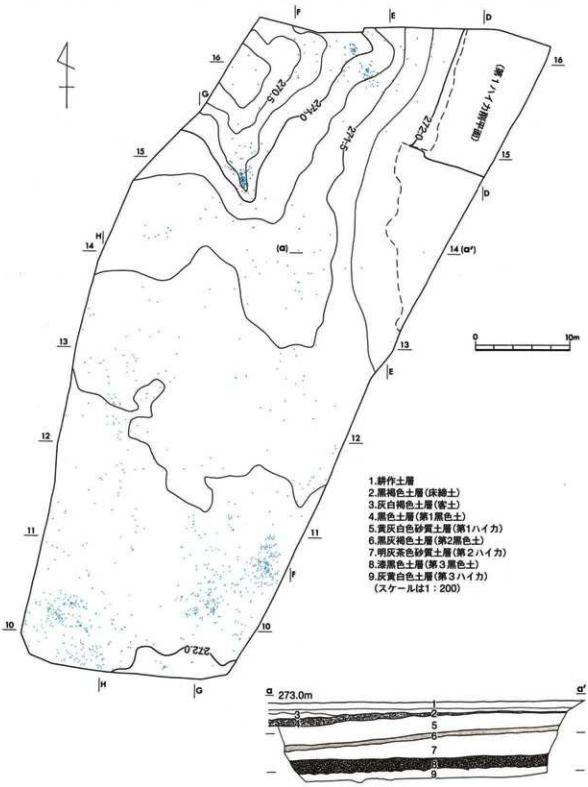
第49図は、石器について出土の分布をみたものである。これも傾向としては、縄文土器と同じように調査区の南側に比較的まとまって出土していることが分かる。

第50図は、弥生土器の出土分布を表したものである。これをみると、縄文土器や石器とは異なって、調査区の南側ではほとんどみられず、逆に北側の緩やかな谷地形の部分にまとまって出土していることが分かる。

縄文土器（第51～54図、図版42～44）

第51図～52図は北白川上層式・彦崎kⅡ式を中心とする土器群である。第51図の１～９は磨消縄文を有し、このうち１・４・７は撚りがＬＲ縄文である。１は丸みを帯び内湾する口縁部と胴部をもつ浅鉢で、調整は内外面ともにミガキである。４・７は浅鉢の口縁部片で、調整は内外面はミガキで、７は口唇に刺突と外面に沈線が施される。２～３・５～６・８～21・23～24・26～28は撚りがＲＬ縄文で、10・13～28は口縁端部に縄文が施される。２・５～６・８～９は浅鉢の口縁である。調整は、２は内面にミガキと口唇に面取りぎみのナデ、５は内外面にミガキと口唇に面取りぎみのナデ、８は内外面にミガキ、９は内面にミガキと口唇にナデ、６は内面は粗いミガキ後ナデである。６・８は外面に沈線が施されている。３・26は鉢の口縁部片で、３は内面と口唇にミガキがみられる。26は内面に強めのナデとミガキ、外面に粗いミガキがみられる。10～13・16・18～21・23・27～28は深鉢の口縁部片で、12は口縁部に幅広の縄文帯をもつ。10～13・16・19～21の調整は内外面ともにミガキである。23は内面は棒状工具による横位条痕後軽いナデ、口唇から外面はナデ、外面

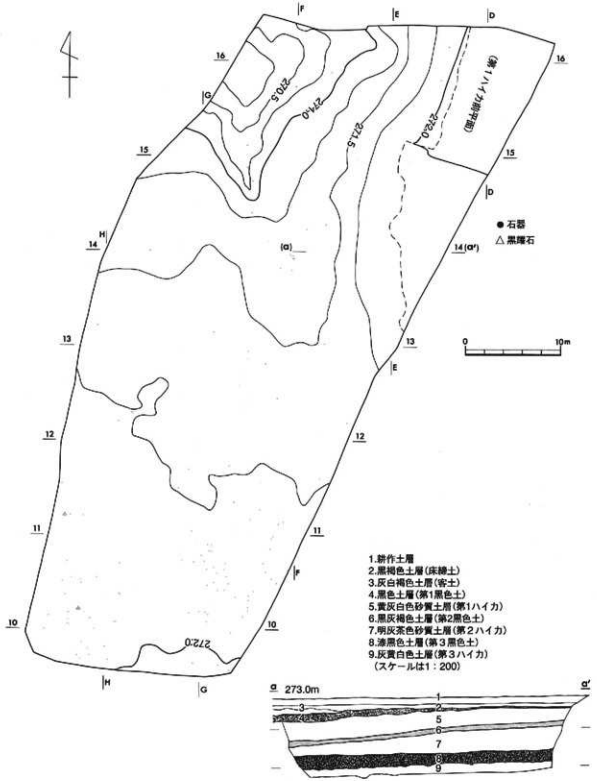
はミガキがである。27は内外面ともにナデで、口唇は面取りぎみである。28は内外面は丁寧なナデ、外面はミガキである。14は深鉢で、外面には羽状縄文がみられ、調整は内外面ともミガキである。15は深鉢の体部で、内外面ともミガキがみられる。24は深鉢の口縁で、調整は内外面ともやや粗いミガキである。17は口縁部片で、内外面にミガキがみられる。22は磨消縄文の深鉢の体部で、調整は内面はナデで、外面に浅い沈線が施される。25は鉢の口縁部片で、内面にナデがみられる。14・



第48図　D区第1黒色土層縄文土器出土分布図（1：400）

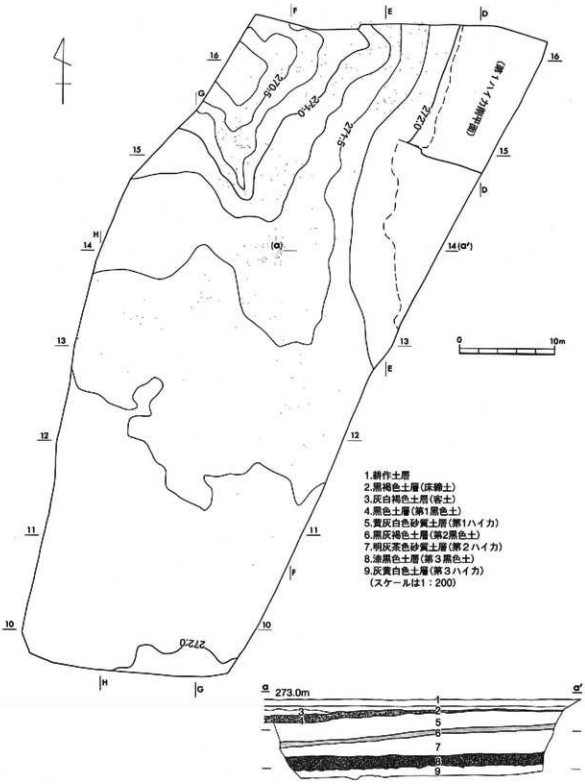
19・21は口縁部分は玉縁状である。

第52図は、1・4・5・13は縄文をもつもので撚りはＲＬである。1は深鉢で口縁に突起がつくもので、調整は内外面はナデで、外面に沈線が施されている。また、口縁部に幅広の縄文帯をもつ。4・5・13は深鉢の口縁部片である。調整は、4は内面に粗いミガキのちナデ、口唇に縄文、外面にナデ、5は内面にミガキ、口唇と外面はナデ、13は内面はナデである。また、4は口唇に縄文、

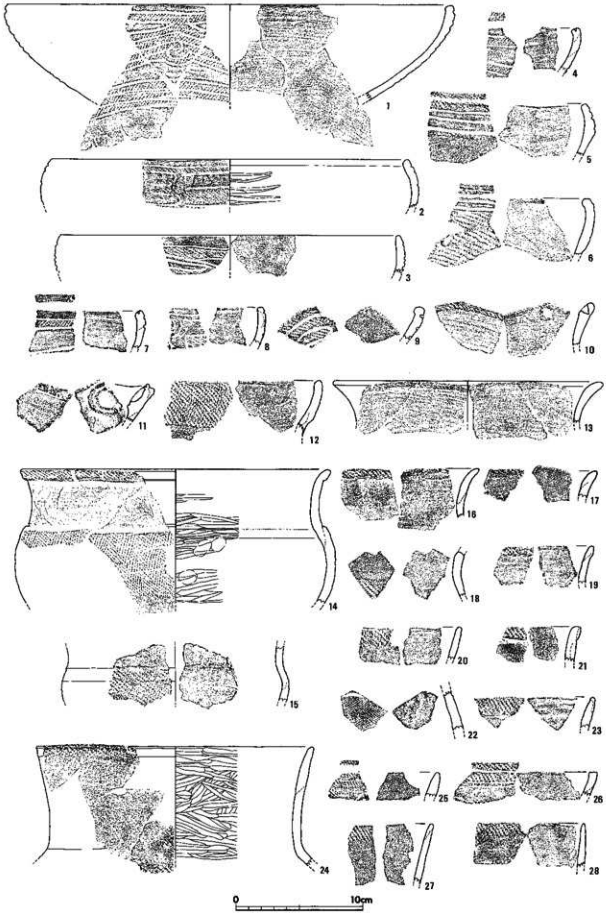


第49図　D区第Ⅰ黒色土層石器類出土分布図（1：400）

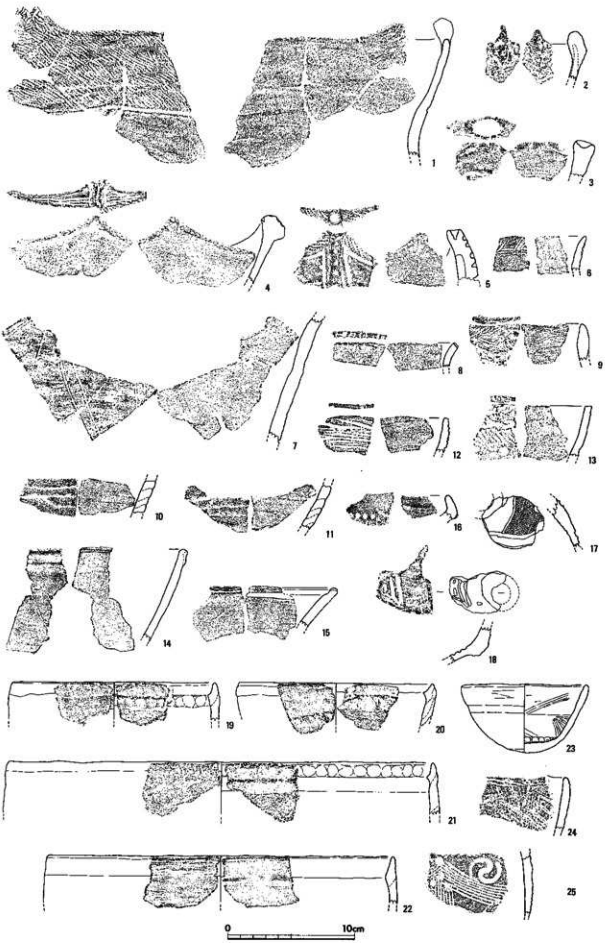
13は口唇に縄文と結節縄文が施され、外面の穿孔は途中までのものと思われる。17・18は注口土器である。17は内面にナデ、外面にミガキによる調整がされ、また外面に沈線と擦りがＬＲの磨消縄文が施されている。19～22は粗製深鉢で、口縁内面に断面三角状の突帯が付けられたもので、指の押圧によって稜がつけられている。調整は、19・21は内外面ともナデである。20は内面は粗いミガキで、口唇は丁寧なナデ、外面はナデである。22は内面は丁寧なナデと粗いミガキ、口唇はミガキ、



第50図　D区第Ⅰ黒色土層弥生土器出土分布図（1：400）



第51図　D区第1黒色土層出土縄文土器実測図（1）（1：3）



第52図　D区第Ⅰ黒色土層出土縄文土器実測図（2）（1：3）

外面は粗いミガキである。23は碗形土器で、調整は内面は細い棒状の工具による押さえぎみのナデ、外面はケズリ後ナデである。2は深鉢の突起で、調整は内外面はナデである。3も深鉢の突起で、波状口縁である。内面は粗いミガキのちナデ、口唇はミガキ、外面はナデによる調整がされている。9・24は深鉢の口縁部片である。9は内面はミガキによる調整がされ、外面は無節の撚り糸文で格子状の文様がみられる。24の内面はミガキによる調整がされている。12・14・15・16は浅鉢の口縁部片である。調整は、12は内外面はナデ、口唇は面取りぎみのナデ、14・15は内外面ともミガキである。また、15は内面に棒状工具による沈線が施されている。16は内外面ともナデによる調整がされ、外面には刻目が施されている。7は深鉢の体部で、調整はナデで、2条1単位の沈線文が縦位に施されている。8は口縁部片で、調整は内外面ともミガキで、口唇に只殻腹縁による刺突が施されている。6は口縁部片で、調整はナデで、外面に刺突と沈線が施されている。10～11・25は体部片である。10と11の調整はいずれもナデで、外面は巻き上げの様子をとどめ、隆帯文の変わりの装飾効果を狙って故意に継ぎ目を残したものと推定される。25は外来系の注口土器で、内面はナデによる調整がされ、外面はS字状の文様と8条1単位の櫛描き沈線が弧状に施されている。

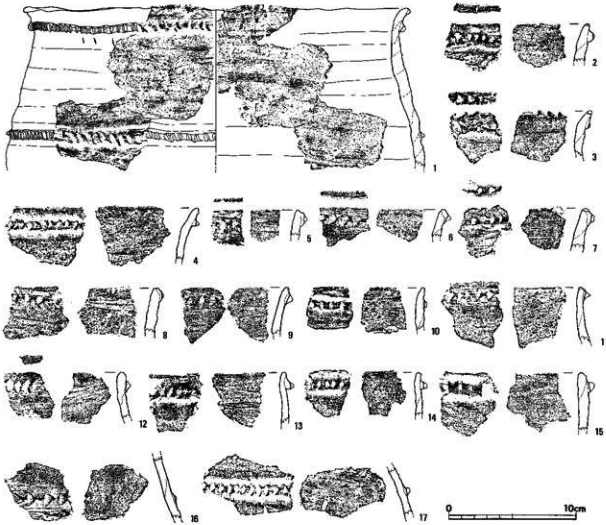
第53図のものはすべて刻目をもつ突帯文土器で、沢田式に併行すると思われる。1～15は深鉢の口縁部片である。調整は、1・3・5・9～11・14～15はいずれも内外面ともナデである。また、1は二条突帯で、14には羽状縄文が施されている。2は内外面はケズリで、口唇はナデである。4は内外面は条痕後雑なナデで、口唇は横ナデである。6は内面はケズリで、口唇と外面はナデである。7は内面はケズリ後ナデで、口唇は刻目、外面はケズリである。8は内面は条痕とケズリで、外面はケズリである。12は外面はケズリである。また、10・12・15の外面と、14の口縁にはススが付着している。13は鉢の口縁部片で、調整は内面は条痕と条痕後ナデで、口唇は面取りぎみのナデ、外面はナデである。また、外面と突帯部にわずかにススが付着している。16～17は深鉢の体部片である。16は、調整は内面はナデで、外面は雑なナデである。17は二条突帯で、調整は内外面とも板状工具での横位のナデで、外面と突帯部及びその下方に炭化物が付着している。これらの突帯の位置は、1・4・10・14～15は口唇のやや下に、16～17は胴部に、その他は口唇に接している。また、2～3・7は口唇と突帯に刻目、その他は突帯に刻目が施されている。

第54図は1～5は単純口縁の無文深鉢である。うち、1～3・5は粗製深鉢である。調整は、1は内面に丁寧なナデ（指頭圧痕あり）と、外面は粗いナデである。2は内面は条痕後ナデ、口唇は横ナデ、外面は条痕である。3は内面はナデ、口唇は横ナデ、外面は粗いナデである。5は内外面はナデである。4は深鉢で、調整は内面はミガキ、口唇はナデ、外面はケズリ後粗いミガキである。6～26は底部片である。6～10・17は平底となる。調整は6・7・17は内外面ともにナデである。8は不明だが、底部と外面には指頭圧痕がみられる。9は深鉢で、内面は強めのナデ、外面はナデによる調整がされ、外側からの穿孔がされている。10は内面は幅約3㎜程の板状の工具による押さえぎみのナデ後ナデ、外面はナデによる調整がされている。11～13・19は上げ底となる。11は内面は板状の工具で押さえぎみに強めのナデ、外面側面は板状のような工具により下から上にかき上げるような調整がされている。12は内面は板状の工具による押さえぎみのナデ後やや丁寧なナデによる調整がされている。13は内面は丁寧なナデ、外面はやや粗いナデによる調整がされている。19は内外面ともにナデによる調整がされている可能性がある。14は底部側面が外反しながら立上り上げ底になっおり、内面は板状工具によるケズリぎみのナデによる調整されて可能性があり、外面はや

や粗めのナデによる調整がされている。15～16・18・20は高台状になっている。調整は、16は内面は幅の狭い板状工具による押さえぎみのナデのちナデと思われ、外面はやや雑なナデである。15・18は内外面ともにナデである。20は内面は幅3㎜大の板状工具によって押さえぎみのナデで、外面は雑なナデである。21～25は浅鉢である。21は平底になっていて、調整は内面は幅のせまい板状の工具で押さえぎみのナデとナデ、外面はミガキ後ナデの可能性があり網代圧痕がある。22は内面は板状工具による押さえぎみのナデ後指によるナデ、外面は強めのナデと面取りぎみのナデによる調整がされている。23～24は高台状になっている。調整は、23は内外面ともナデである。24は内面は板状の工具で押さえぎみのナデ後丁寧なナデ、外面は面取りぎみなナデと雑なナデで外面からの穿孔がされている。25は丸底で、調整は内面は幅2.5㎝程の板状工具による押さえぎみのナデとナデで、外面は光沢がありミガキの可能性がある。26は内面が幅の細い板状の工具で押さえぎみのナデ、外面はナデによる調整がされている。

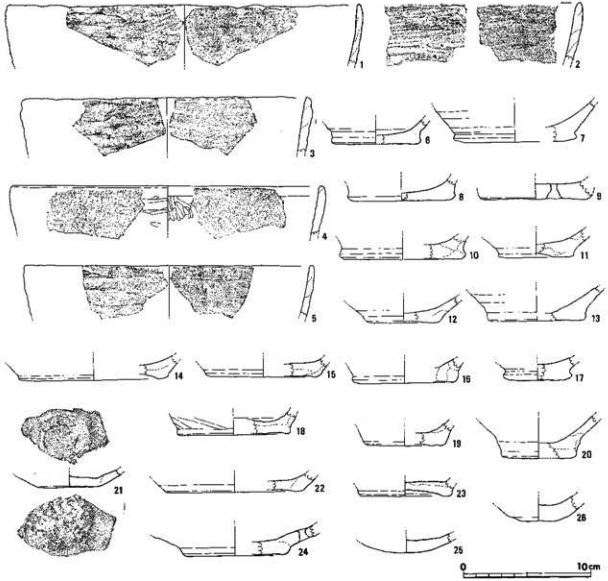
石器類（第55～57図、図版62～63）

第1黒色土層から出土した石器類には、石鏃、スクレーパー、石斧、叩石、磨石、石皿が認められた。第55図1～9は、石鏃である。1～2は平基無茎式、3～9は凹基無茎式である。これらの



第53図　D区第1黒色土層出土縄文土器実測図（3）（1：3）

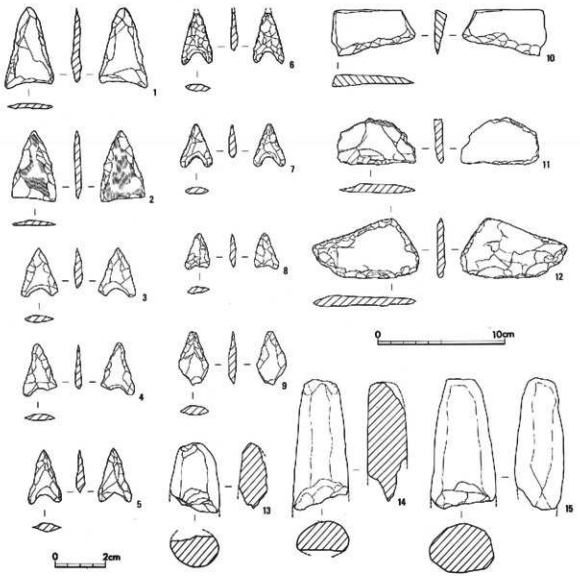
うち、調整の点で注目されるのが2で、刃部は別にすると、両平坦面ともよく磨かれている特徴がある。10～12は、スクレーパーと考えられるものである。13～15は磨製石斧で、いずれも刃部を欠損し、基部のみが残存する。1は重量が1.93g、長さが2.9cm、幅が1.8cm、厚さが0.35cmである。2は重量が1.35g、長さが2.6cm、幅が1.6cm、厚さが0.2cmである。3は重量が0.69g、長さが1.5cm、幅が1.7cm、厚さが0.3cmである。4は重量が0.61g、長さが1.7cm、幅が1.3cm、厚さが0.3cmである。5は重量が0.77g、長さが1.7cm、幅が1.2cm、厚さが0.4cmである。6は重量が0.45g、長さが1.5cm、幅が1.2cm、厚さが0.25cmである。7は重量が0.37g、長さが1.3cm、幅が1.3cm、厚さが0.3cmである。8は重量が0.24g、長さが1.3cm、幅が1.0cm、厚さが0.25cmである。9は重量が0.85g、長さが2.1cm、幅が1.1cm、厚さが0.35cmである。10は重量が3.41g、長さが3.1cm、幅が1.8cm、厚さが0.4cmである。11は重量が22.63g、長さが6.1cm、幅が3.6cm、厚さが6.5cmである。12は重量が30.18g、長さが4.7cm、幅が8.2cm、厚さが0.8cmである。13は重量が62.83g、長さが5.4cm、幅が3.9cm、厚さが2.5cmである。14は重量が191.02g、長さが9.85cm、幅が4.3cm、厚さが3.1cmである。15は重量が306.58g、長さが10.1cm、幅が5.15cm、厚さが3.7cmである。



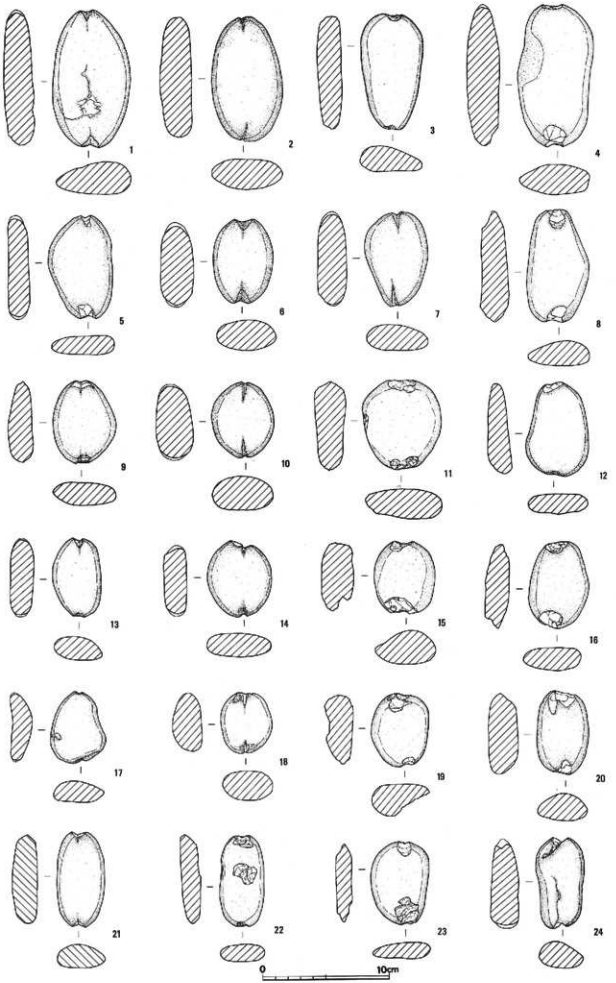
第54図　D区第1黒色土層出土縄文土器実測図（4）（1：3）

石材は、1～4・6～10は石英安山岩、5は石英安山岩または流紋岩溶岩と思われる。13は流紋岩溶岩、14は珪質片岩であり、15は珪質片岩と思われる。

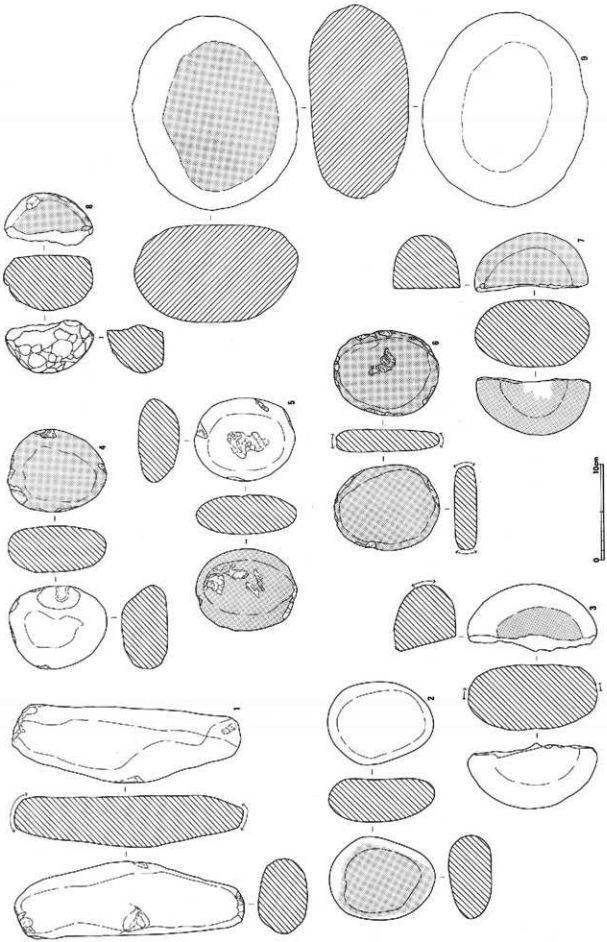
第56図1～24は石錘である。いづれも円礫の長辺を2か所打ち欠いたものである。1は重量が245.20g、長さが10.9cm、幅が6.2cm、厚さが2.6cmである。2は重量が208.75g、長さが9.9cm、幅が5.6cm、厚さが2.55cmである。3は重量が126.39g、長さが9.1cm、幅が4.8cm、厚さが2.0cmである。4は重量が244.80g、長さが11.3cm、幅が6.0cm、厚さが2.5cmである。5は重量が102.40g、長さが8.2cm、幅が5.5cm、厚さが1.4cmである。6は重量が121.53g、長さが6.65cm、幅が4.6cm、厚さが2.5cmである。7は重量が114.89g、長さが7.5cm、幅が5.0cm、厚さが2.2cmである。8は重量が127.77g、長さが8.9cm、幅が4.8cm、厚さが1.9cmである。9は重量が92.01g、長さが6.55cm、幅が5.0cm、厚さが2.0cmである。10は重量が124.73g、長さが6.0cm、幅が4.95cm、厚さが2.8cmである。11は重量が160.43g、長さが7.1cm、幅が6.2cm、厚さが2.6cmである。12は重量が104.46g、長さが7.5cm、幅が5.0cm、厚さが2.6cmである。13は重量が69.01g、長さが6.25cm、幅が3.85cm、厚さが1.9cmである。14は重量が86.55g、長さが6.0cm、幅が5.1cm、厚さが1.8cmである。15は重量が96.79g、長さ



第55図　D区第1黒色土層出土石器実測図（1）（1～10は2：3、11～15は1：3）



第56図　D区第1黒色土層出土石器（石錘）実測図（1：3）



第57図　D区第Ⅰ黒色土層出土石器実測図（3）（1：4）

が5.6cm、幅が4.8cm、厚さが2.7cmである。16は重量が86.14ｇ、長さが6.9cm、幅が4.7cm、厚みが1.9cmである。17は重量が50.11ｇ、長さが5.7cm、幅が4.35cm、厚さ1.7cmである。18は重量が70.15ｇ、長さが4.9cm、幅が3.95cm、厚さが2.3cmである。19は重量が71.37ｇ、長さが5.8cm、幅が4.6cm、厚みが2.5cmである。20は重量が88.26ｇ、長さが6.65cm、幅が4.15cm、厚みが2.1cmである。21は重量が95.77ｇ、長さが3.6cm、幅が7.5cm、厚みが2.1cmである。22は重量が55.82ｇ、長さが7.2cm、幅が3.6cm、厚みが1.4cmである。23は重量が53.84ｇ、長さは6.3cm幅が4.6cm、厚みが1.3cmである。24は重量が84.43ｇ、長さが7.2cm、幅が3.85cm、厚みが2.2cmである。　石材は、１～２・８は細粒の花崗岩（アップライト）、３・６・13・14・15は細粒の内緑岩、４・７は石英安山岩、５・23は流紋岩、９～10・16～17は砂岩、12・22は石英安山岩質凝灰岩、19・24は流紋岩質の結晶質凝灰岩である。11は細粒の花崗岩（アップライト）または流紋岩質の結晶質凝灰岩である。21は流紋岩質凝灰岩または石英安山岩質凝灰岩である。６は細粒の内緑岩、18は砂岩と思われ、20は流紋岩質の結晶質凝灰岩または、石英斑岩と思われる。

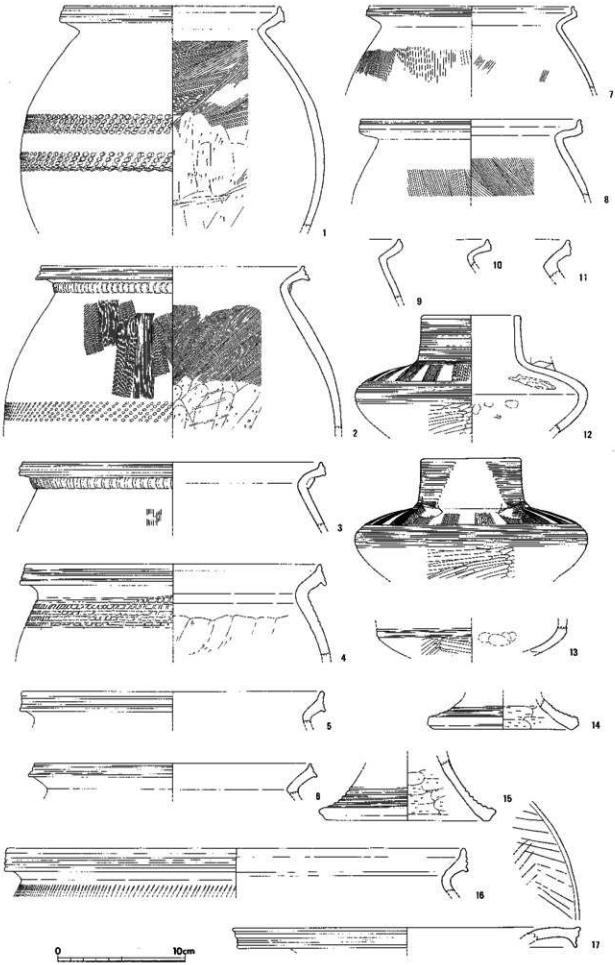
第57図１は棒柱状の叩石で、両端部に敲打した痕跡が認められる。長さ24cm、最大幅7.8cm、である。２～８は磨石で、２～５・８が特に片面に使用された痕跡が顕著に認められ、６・７は両面とも使用されている痕跡がある。また、なかには敲打による痕跡とみられる潰しがあるものがあり、３・４には側縁の一部、５は片面のほぼ中央、６は両端を中心とする側縁部、７は片面の中央と側縁部の大半、８は片面のほぼ全体に及んでおり、クレイター状に凸凹する。９は２～８に比べるとやや大型の石材であり、石皿と考えられ、片面に使用された痕跡が認められる。

重量は、１が1.516kg、２が635.32ｇ、３が850.33ｇ、４が640.68ｇ、５が581.17ｇ、６が397.84ｇ、７が707.30ｇ、８が364.48ｇ、９が５kgである。長さは、２が11.1cm、３が13.6cm、４が10.2cm、５が10.6cm、６が11.0cm、７が11.9cm、８が9.3cm、９が20.6cmである。幅は２が8.7cm、４が8.75cm、５が7.6cm、６が9.0cm、９が17.4cmである。厚さは、１が5.2cm、２が4.5cm、３が6.4cm、４が4.8cm、５が4.2cm、６が2.5cm、７が7.0cm、８が5.9cm、９が10.4cmである。

石材は、１・５は細粒の内緑岩、２～３は斑晶質安山岩、７は石英安山岩質の凝灰岩、８は安山岩質凝灰岩、９は花崗岩である。６は安山岩質の凝灰岩の可能性がある。

弥生土器（第58～60図、図版54・55）

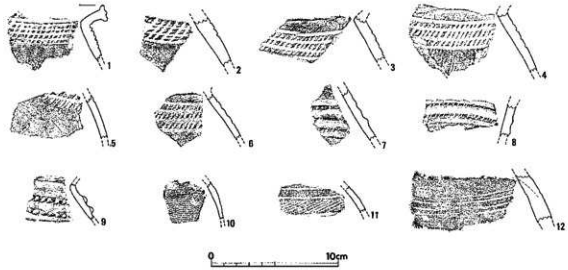
第58図は、１～３・７～８は中期の甕である。１は内面に横ナデとハケ目・ケズリによる調整、口縁に凹線、外面に横ナデとナデによる調整と列点文が見られる。２は内面に横ナデとハケ目・ケズリ後ナデによる調整、口縁に凹線、頸部外面に指頭圧痕文帯、外面にハケ目調整と列点文がみられる。３も頸部に指頭圧痕文帯を有し、内面にナデ調整、口縁に擬凹線、外面にハケ目後ナデによる調整が見られる。７・８は内外面にハケ目調整、口縁に凹線を有する中期中頃のものである。４は肩部に凹線と重層刻目文を有する「塩町式」のもので、内面にはケズリ、内面と外面には横ナデによる調整がみられる。中期後葉から後期にかけてのものと考えられる。５～６は後期の甕と考えられ、内外面に横ナデ調整、口縁に凹線がみられる。９～11は内外面にナデ調整と、口縁に凹線を有する甕である。時期は、口縁の形から、９～10は中期後葉、11は中期後葉から後期にかけてのものと考えられる。12は後期前葉の「塩町式」の台付鉢で、外面に把手の痕本が残る。調整は、内面に横ナデと、棒状のあて具で押さえた後にナデが、外面には横ナデ・ミガキ、また凹線文がみられ



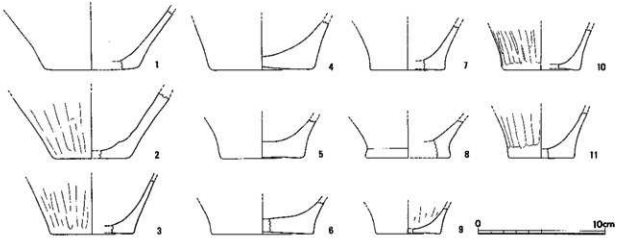
第58図　D区出土弥生土器実測図（1）（1：3）

る。13～15は高杯である。13は坏部に当たり、内面に指頭圧痕、外面にミガキによる調整と、凹線がみられ、中期後半のものと考えられる。14～15は脚部で、内面にはケズリ調整、外面には凹線がみられ、後期初めのものと考えられる。16は頸部下に斜行刺突文を有することから、「塩町式」の特徴を受け継いだ後期の甕と考えられる。口縁には凹線がみられる。17は中期の壺の口縁の可能性がある。内面に横ナデ調整と綾杉文、口縁に凹線、外面に横ナデ調整がみられる。

第59図は、弥生土器の甕類の口縁部から体部にかけた小破片をまとめたものである。1～6は凹線と亜層刻目文を有する中期の「塩町式」のものである。その他の調整・施文は、1は内面に横ナ



第59図　D区出土弥生土器実測図（2）（1：3）



第60図　D区出土弥生土器実測図（3）（1：3）

第61図　D区出土須恵器実測図（1：3）

デとケズリの調整、口縁に凹線による施文、外面の刺突の下にハケ目調整がみられる。2は内面にナデとケズリ、外面に横ナデによる調整がみられる。3は肩部に当たると思われ、内面にハケ目とケズリ後ハケ目、外面に横ナデによる調整がみられる。4は内面に横方向のハケ目とケズリ、外面に横ナデと縦方向のハケ目による調整がみられる。5は内面にナデ、外面に縦方向のハケ目による調整がみられる。6は内面にナデと縦方向のハケ目、外面に横ナデとミガキによる調整がみられる。7～8はナデ調整と、凹線と斜め方向の刻目による施文を有するもので、「塩町式」の可能性がある。9は貼り付け突帯に連続刻目文を有するもので、中期中頃の「塩町式」のものと思われる。その他の調整は、内面には横ナデと斜め方向のハケ目、外面には横ナデがみられる。10は後期後半のものと思われ、内面にはケズリ、外面にはナデによる調整と、施文として波状文がみられる。11は中期後半以降のものと思われ、内面はケズリ調整、外面には沈線と綾杉文がみられる。12はナデ調整と沈線を有するもので、時期は不明である。

第60図は、弥生土器の底部をまとめたものである。1～3・5・7～9・11は平底で、4・6・10はやや上げ底である。調整はだいたいナデか丁寧なナデかミガキである。

須恵器（第61図）

4点出土した。1・2は甕の体部片である。調整は、外面が格子状タタキメ、内面が同心円状タタキメの痕跡を残す。3は、杯の口縁部であるが、小破片のため、身か蓋かは不明である。調整は内外面とも回転ナデである。4は、坏類の体部片であろう。調整は内外面とも回転ナデである。

(2) 第2黒色土層から検出の遺物　出土遺物には僅かの縄文土器と10数点ほどの石器がある。

縄文土器（第63図、図版45）

ここでは5点を図示した。1～5は深鉢である。1は口縁で、調整はナデであるが摩耗が著しい。2は鉢の口縁部片で、内外面ともに粗いナデが施されている。3～4は体部で、3の内外面には二枚貝による条痕が施されている。4は曽畑式のものであり、内面には二枚貝による条痕と条痕後ナデが、外面には条痕調整後条痕状の斜向の沈線が施されている。5は底部で、内外面ともナデが施されている。

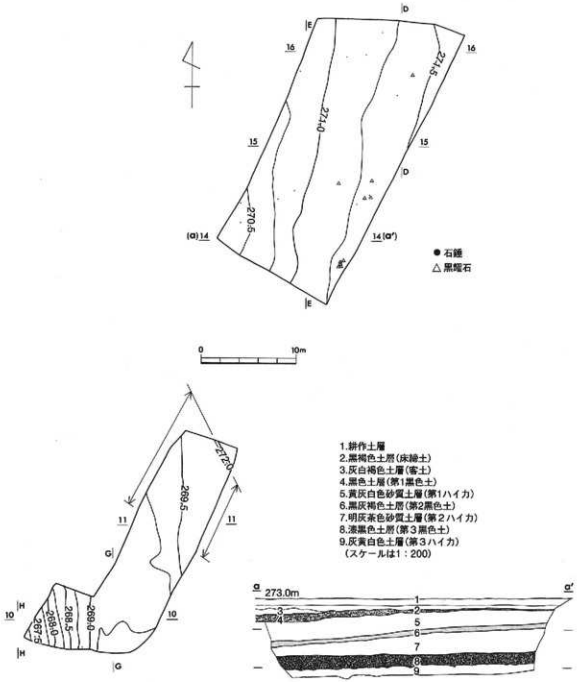
石器類（第64図、図版63）

1～10は石錘である。いずれも円礫の長辺を2か所打ち欠いたものである。

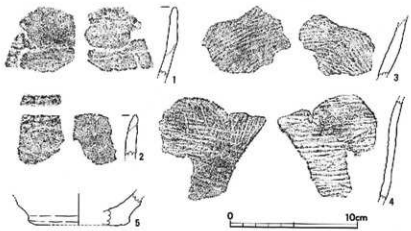
11は不明であるが、一方に剥離面がありそれが摩滅していることから、抉りをつけるよう整形し、柄の先端に装着して掘り棒として使用された可能性がある。12は石皿で、片面のみ使用されている。

重量は、1が205.40ｇ、2が217.86ｇ、3が143.51ｇ、4が179.69ｇ、5が105.06ｇ、6が122.56ｇ、7が194.24ｇ、8が174.47ｇ、9が247.43ｇ、10が81.03ｇ、11が47.77ｇ、12が655.89ｇである。長さは、1が9.2㎝、2が8.0㎝、3が8.4㎝、4が8.4㎝、5が6.3㎝、6が8.1㎝、7が9.8㎝、8が8.6㎝、9が9.6㎝、10が8.7㎝、11が6.9㎝、12が13.2㎝である。幅は、1が7.5㎝、2が6.6㎝、3が6.4㎝、4が6.5㎝、5が6.5㎝、6が5.8㎝、7が7.4㎝、8が7.3㎝、9が7.5㎝、10が7.0㎝、11が4.9㎝、12が8.0㎝である。厚さは、1が2.2㎝、2が2.4㎝、3が2.1㎝、4が2.0㎝、5が1.6㎝、6が1.8㎝、7が1.7㎝、8が2.1㎝、9が1.9㎝、11が1.2㎝、12が3.2㎝である。

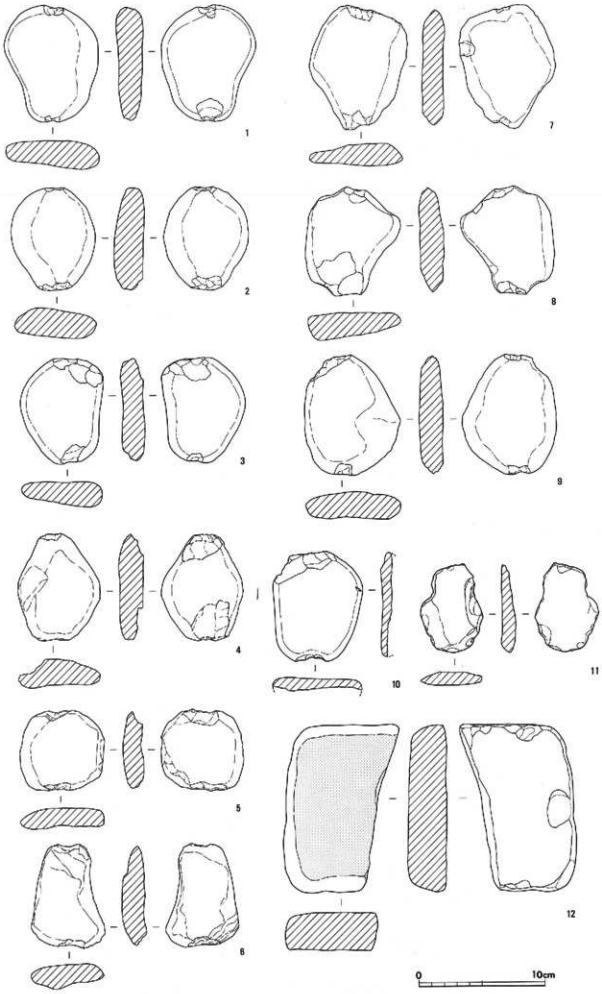
石材は、1～2・9～10は細粒の花崗岩（アップライト）、3・7～8は流紋岩質の火山灰であ



第62図　D区第２黒色土層遺物出土分布図（１：400）



第63図　D区第２黒色土層出土縄文土器実測図（１：３）



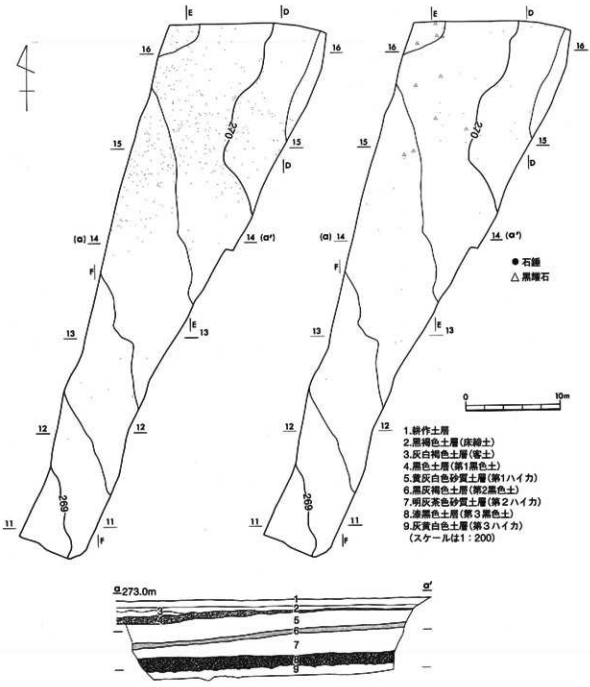
第64図　D区第２黒色土層出土石器実測図（１：３）

る。3・7は結晶質で石英と長石が目立ち、8は溶結凝灰岩である。4は安山岩質の火山灰（堆積岩）、5は花崗斑岩、6、11は流紋岩溶岩、12は流紋岩質の結晶質凝灰岩である。

(3) 第3黒色土層検出の遺構

落とし穴（第71図、図版12）

調査区北部に位置する落とし穴である。隅丸方形を呈しており、長さ79cm・幅75cm・深さ63cmである。底面中央やや東寄りには径10cm・深さ19cmほどに掘り込まれた小さなピットがある。そこには獲物に突き刺さるよう先端を尖らせた杭が据え付けられていたと考えられる。



第65図　D区第3黒色土上層遺物出土分布図（1：400、左は縄文土器、右は石器）

剥片石器とその出土状況（第72・73図、図版64）

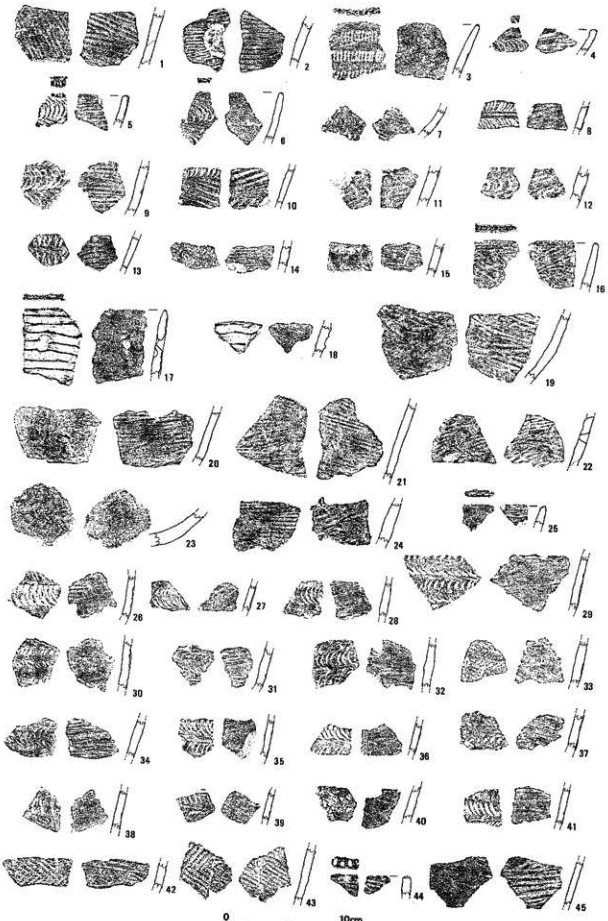
調査区南部の窪みから剥片石器1点が出土している。その窪みは、幅30～40cmで勾玉状にくねった形をしており、最長部分で100cm、北側部分がやや楕円形状に深く落ち込んでいる。剥片石器はその最も深いところ、深さ25cmの地点で検出した。

(4) 第3黒色土層出土の遺物

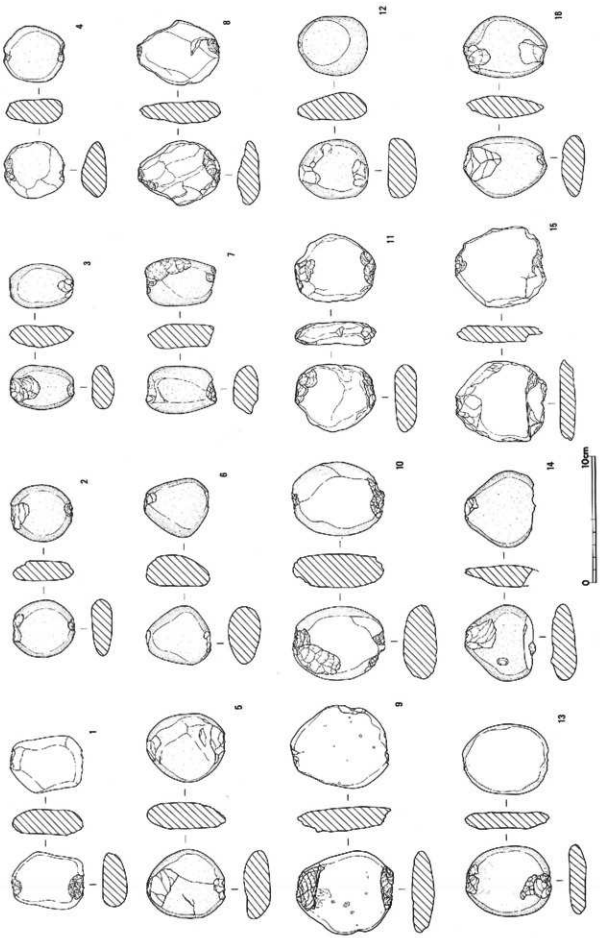
第65図は、第3黒色土層のなかでも上層の遺物の出土分布を表したものである。これによると、その分布は調査区の南側ではほとんどみられず、北側でかなりの点数分布していることが分かる。

縄文土器（第66図、図版45）

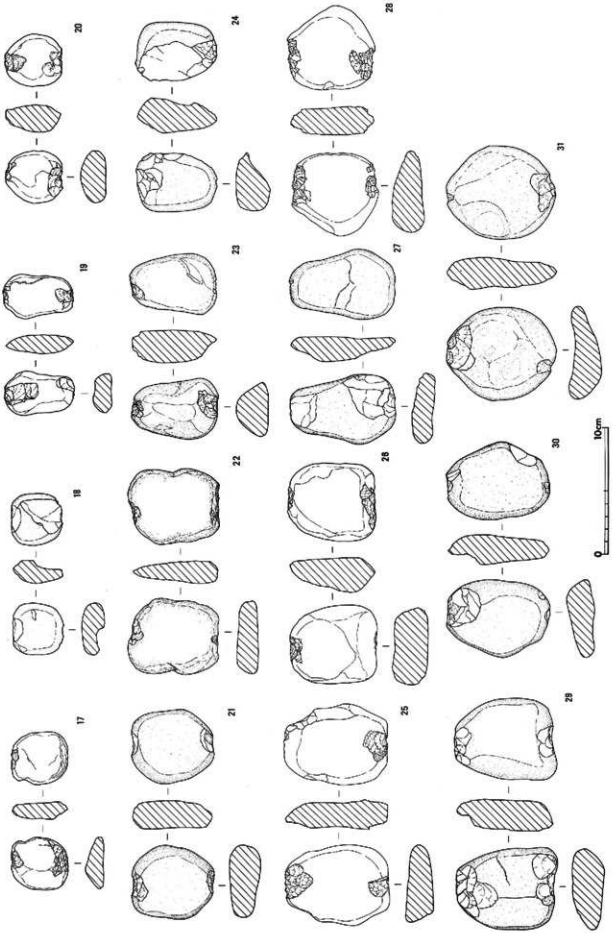
1～3・6～9・11・14・17～21・23～24・26・29～32・34～35・38・40～41は深鉢で、3・6・17は口縁部片である。3の内面はケズリによる調整がされている可能性があり、口唇には刻目、外面にはナデによる調整の後連続した線状の爪形文が施されている。6は内外面に横ナデによる調整がされ、口唇に刻目が施されている。また、外面には二枚貝による横条痕の後軽くナデがされている可能性があり、その後D字の連続爪形文が施されている。17は内面にはやや強めの横ナデと二枚貝による横条痕後丁寧なナデによる調整がされ、口唇には刻目、外面には強い隆起帯文が施されている。1～2・7～9・11・14・18～21・23～24・26・29～32・34～35・・40～41は体部である。1は内面は二枚貝による条痕、外面は二枚貝による条痕のちナデによる調整がされている。2は内面は二枚貝による横位の条痕、外面は二枚貝による斜位の条痕による調整がされている。7は内面は二枚貝による横位条痕後やや丁寧なナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。8は内面は二枚貝による条痕後ナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。9は内面に二枚貝による横条痕による調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。11は内面に二枚貝による条痕後軽いナデ、口唇に面取りぎみの横ナデによる調整がされ、口唇に刻目、外面にナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。14は内面は二枚貝による横位条痕後軽くナデによる調整がされている可能性があり、外面はナデによる調整の後D字形の連続爪形文が施されている。18は内面は二枚貝による条痕による調整がされ、外面は強い隆起帯文が施されている。19の外面は条痕後やや強めのナデによる調整がされ、内面は二枚貝による条痕後軽いナデによる調整がされている可能性があり、外面は不規則の条痕後やや強めのナデによる調整がされている。20の内面は二枚貝による条痕、外面は条痕後ナデによる調整がされている。21は内外面に二枚貝による条痕による調整がされている可能性がある。23の内外面はナデによる調整がされている。24は内面に二枚貝による条痕後ナデ、外面に二枚貝による条痕による調整がされている。26は内面は二枚貝による横位条痕による調整がされ、外面はC字形の連続爪形文が施されている。29は内面は二枚貝による横位の条痕後粗い横ナデによる調整がされ、外面はナデ後C字形の連続爪形文が施されている。30は内面は二枚貝による条痕後軽いナデによる調整がされている可能性があり、外面にはナデによる調整の後C字形の連続爪形文が見られる。31は内面は二枚貝による横条痕による調整がされ、外面はナデによる調整の後C字形の連続爪形文が施されている。32・35の内面はナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後C字形の連続爪形文が施されている。34・41は内面は二枚貝による条痕による調整がされ、外面はナデによる調整の後C字形の連続爪形文が施されている。40は内面は二枚貝に



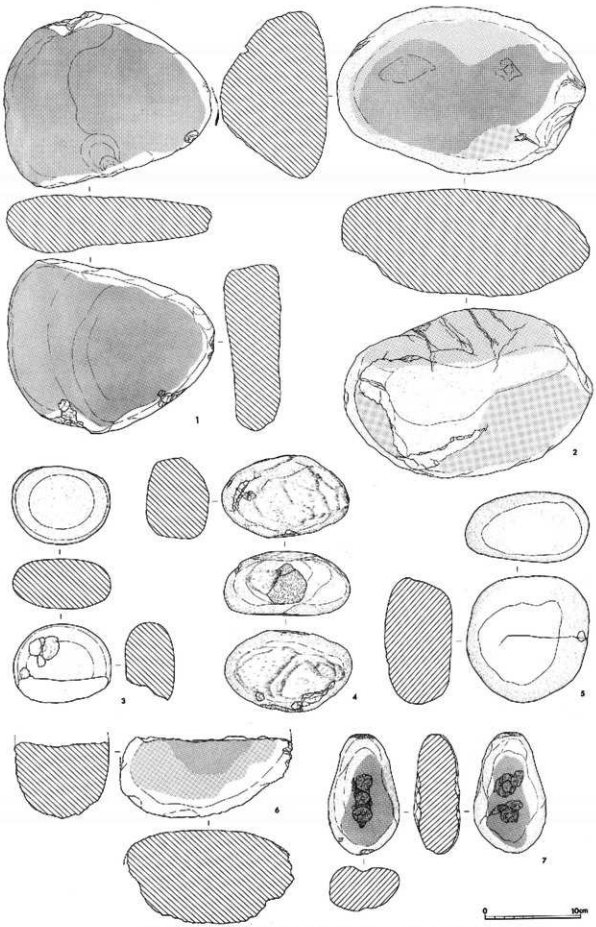
第66図　D区第3黒色土層出土縄文土器実測図（1：3）



第67図　D区第３黒色土層出土石器（石錘）実測図（1）（1：3）

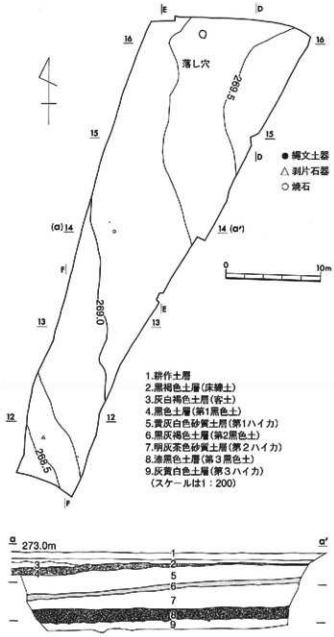


第68図　D区第3黒色土層出土石器（石錘）実測図（2）（1：3）



第69図　D区第3黒色土層出土石器類実測図（3）（1：4）

よる横位条痕後ナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後刺突ぎみのC字形の連続爪形文が施されている。10・12・15・27～28・33・36～37～39は 深鉢の体部と思われる。10・12は内面は二枚貝による条痕後軽くナデによる調整がされ、外面はD字形の連続爪形文が施されている。15は内面は二枚貝による条痕後軽くナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形の爪形文もしくは刺突文が施されている。27・33・36・37・39は内面に二枚貝による条痕後ナデによる調整がされ、外面にナデによる調整の後C字形の連続爪形文が施されている。28は内面は二枚貝による条痕による調整がされ、外面はナデ後C字形の連続爪形文が施されている。38は内面は二枚貝による横条痕後ナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後C字形の連続爪形文が施されている。4・5・16・25は鉢の口縁部片で、13・22・42～45は鉢の体部片である。4は内面は二枚貝による条痕後ナデ、口唇は面取りぎみの横ナデによる調整がされ、外面はナデによる調整の後D字形



第70図　D区第3黒色土下層遺物出土分布図（1：400）